
ヘヴンズ・ゲート

唯人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘヴンズ・ゲート

【Nコード】

N7229Q

【作者名】

唯人

【あらすじ】

交通事故により初恋の少年を亡くした奏子。その死の責任は自分にあると感じた奏子は家に引き籠るようになり、学校生活も送れなくなった。

それから二十年、奏子自身も病に侵されその人生を終えようとしていた。そんな奏子の目の前に、天使と死神を名乗る二人の美しい青年が現れる。

高校生だった頃の初恋と青春の記憶。そして「人殺し」の烙印を背負った少年。親友と教え子を失った教師の葛藤。

果たして、「天国」と「地獄」の本当の正体とはなんなのか。「門番」達の役目とは――。

＊一般的なファンタジーの要素はあまりありません。＊

ブローグ

あれはまだ、私が年端も行かぬ小さな子供の頃の出来事だった。

同じような外観の一戸建てが整然と並ぶ新興住宅街。いつもなら学生服姿の少年少女や、キャッチボールをする子供たち、スーパールのビニール袋を手に家路を急ぐ主婦などで賑わう時間だったが、その日はなぜか人氣がなく、町は閑散としていた。

小さな公園の中も私以外の人間はおらず、仕方なく一人きりで砂遊びをしていた時だった。公園の傍を外国人の青年が通りかかった。青年の肌は透き通るように白く、蜂蜜のように金色に輝く髪は、通りを吹き抜ける風にふわりとなびいていた。

なんて綺麗な人なのだろう。青年の飛び抜けて美しい横顔に、幼いながらも憧憬を感じた。

そして何より私の目を惹いたのは、胸元にフリルのついたシャツからフロックコート、靴の先まで全て白で統一された服装だった。

夕暮れの街を、青年はまるで重力など存在しないかのように軽やかに歩み進む。すっかり好奇心を刺激された私は、手にしていたプラスチック製のスコップとバケツを放り出すと、何かに駆り立てられたかのように青年の後を追った。

そう、それは小さな予兆だったのかもしれない。

青年の足取りはゆったりとしているのに、いくら急いでも距離は離れていく。私はしまいに駆け足になった。それでもなかなか追いつけない。青年は硬いアスファルトではなく、空気の上を進んでいるに違いない、そう感じた。

「待ってよ！ お兄ちゃん」

あまりの歩みの速さに、声を上げたその瞬間、青年の懐から何かが転がり落ちた。その何かは夕陽を反射してキラリと輝く。だが青年は落としたことに気付かないのか、そのままの調子でどんどん歩いて行く。私は迷うことなくそれを拾い上げると、再び青年の後姿

に向かつて走り出した。

街路樹が規則的に並ぶ街を抜け、大通りに差し掛かったところで青年はようやく足を止めた。信号は赤だった。しかしその背中では信号待ちをしているというよりも、空を見上げ、何か思案しているように見えた。

私はここぞとばかりに全速力で走ると大きな声を上げた。「お兄ちゃん、外人のお兄ちゃん！」

青年は振り向かない。もう一度全身に力を込め叫んだ。「白い外人のお兄ちゃん！ 落し物だよ！」

青年はゆっくりと振り返った。金色の髪が西日に重なる。私は青年の元に駆け寄った。

「やっと、追いついた……」

青年の緑色の瞳は驚いたように見開いている。息が切れていた私は、怪訝な表情を浮かべたままの青年の足元に座り込むと片手を伸ばした。

「ハイ、お兄ちゃん。これ、落としたでしょ」

手の中に握りしめていた物を差し出した。

長身の青年は膝を折ると、私の手の中の物をまじまじと見つめた。そして自分の所持品であることを確認すると、長い指先でそつとつまみあげた。

「君がこれを拾ってくれたのかい？」

その姿に似合わぬ流暢な日本語だった。

私は笑顔で「うん、うん」と何度も頷いた。「それ、お兄ちゃんのですよ」

青年はああ、と頷いた。「これはとても大切なものなんだ。届けてくれてありがとう」

優しく微笑んだ青年に、「良かったね、お兄ちゃん」と胸を撫で下ろした。

「君には何かお礼をしなくっちゃな」

青年は首を傾げ、顎に人差し指を当てた。「どうするかなあ。こ

んなこと初めてだし」

「お礼？ 何かご褒美をくれるの？」

外国人の青年は一体どんな素敵な物をくれるのだろう。胸を弾ませ期待したが、青年の言葉は意外なものだった。

「残念だけど、君に与えられるような物は何も持っていないんだ。

その代わり、一生のお願い、ってやつを一つだけ叶えてあげてもいい。ああ、でもその頃は一体どうなっているんだろうなあ。こればかりは流石に僕じゃ決められないし」

ブツブツと独り言の様に呟く青年を、私はきょとんとして見つめていた。青年の言葉の意味も理解出来なかった。ただ、何も持っていない、という言葉に少しがっかりした。

そんな私の様子に気付いた青年は、少し困った様に苦笑すると、片手を伸ばし細い指先で私の頬をゆっくりと撫でた。

「お兄ちゃんの手、冷たいね」

体温を感じないほどに冷えた指先は、火照^{ほて}った身体に心地良かった。

「まだ若いんだな」

「どういう意味？」青年の顔を見上げた。

「別に。言葉のままだよ」

吸い込まれるように美しい瞳は何処か寂しそうでもあった。

「これから先、君が僕の存在を心から求める時が来たら、その時にまた会おう。それがお礼だ」

青年は、私と同じ高さの目線で優しく微笑む。「それでいいかい？」

「……でも、お兄ちゃんの名前を知らないよ」

汗でじつとりと濡れた両手で半ズボンを握った。「お兄ちゃんは、何ていう名前なの？」

「僕の名前か。そうだなあ」

青年はその両手を私の肩に置くと、視線を宙に彷徨^{さまよ}わせた。「君は、どんな名前が僕に似合うと思う？」

逆に尋ねられて少し面喰^{めんくら}ったが、それほど深くも考えずに答えた。

「ハクロ！」

「ハクロ？」青年は首を捻^{ひね}った。「なんだい、それは」

「白鷺^{しひやぶ}の事だよ。全身真っ白の羽根の、とても綺麗な鳥なんだ」

先日両親と行った動物園で見た、優雅な鳥。その純白の姿を、父はハクロと呼んでいた事を咄嗟^{とつさ}に思い出した。

「ハクロか。なかなかいい名前だね。じゃあ、君は僕のことをハクロと呼んでくれるかい」

「うん、分かった。ハクロ」

「いい子だ」ハクロは私の頭を撫で回した。私はなんだかとてもくすぐったくて、誇らしい気持ちになった。こんなに綺麗な外国のお兄さんに「いい子だね」と褒めて貰ったんだよ、と。

「もう、帰らなきゃ」

ハクロはすつと立ち上がった。私もそろそろと立ち上がる。「アメリカに帰っちゃうの？」

当時の私には、外国といえばアメリカと中国くらいしか思い浮かばなかった。

「違うよ」空を指差した。「もうゲートが開くからね」

「げえと？」空を見上げた。夕焼けの幻想的な色彩が空を覆っている。

「ああ。じゃあ、サヨナラ。いつか時が来たらまた会おう」

「えっ」瞬きする間もなく、目の前のハクロは忽然^{こっぜん}と姿を消した。辺りを見回すが、ハクロの姿は何処にも無い。

「ハクロ！ 何処に行っちゃったの？」

横断歩道を渡ろうと駆け出した瞬間、トラックのクラクションが鳴った。

「危ないじゃないか！」

運転席の男が声を荒げたと同時に、道を行き交う車の音や人々の声、街の喧騒^{けんそう}が響き渡った。それはまるで止まっていた時間が急に流れ出したかのようだった。

その後、ハク口の姿を見ることは無かった。

病魔

開け放たれた教室の窓からは金木犀の香りが漂ってくる。カーテンを揺らす風はすっかり秋めいていた。

三沢奏子^{みさわ かなこ}は文庫本の頁を閉じた。放課後の教室は奏子以外の生徒の姿は無い。奏子は席を立ち、三階の窓から爪先立ちでグランドを見下ろした。野球部の紅白戦が行われているようで、生徒たちの大きな歓声が響いている。

暫くその様子を見るともなく眺めていると、背中から自分の名を呼ぶ声が聞こえた。

「おい、三沢。何してるんだよ」

振り返ると、同じクラスの小塚俊介^{こつか けんすけ}が眉間に皺を寄せていた。ジヤージ姿の肩には青いハンドタオルが掛けられている。

「あんまり乗り出すと危ないぞ。それとも身投げでもするつもりか？」

よく陽に焼けた肌に、大きな口と少し垂れた目が特徴的な人懐こい顔立ち。奏子は弾かれたように窓から離れた。

「そんなに乗り出していたかな」

頬が赤くなっていやしないかと、慌てて俯いた。

「気が付いていなかったのか？ 小学生じゃないんだから、もっと自分で気を付けろよ」

少し呆れ気味の俊介に、奏子は「うん」と小さく頷いた。

俊介は自分の机の中を覗きこみ、何かを探し始めたが、奏子はまともに顔を上げる事も出来ずにいた。

「おい、俊介。早くしろよ」

暫くすると一人の男子生徒が顔を覗かせた。「紙切れ一枚探すのに、いつまで待たせるつもりなんだよ」

奏子はちらりと声の主を見た。俊介と同じバスケットボール部に所属している、隣のクラスの篠原徹司^{しのはら てつじ}だった。短く刈られた髪、二

キビの痕が幾つか残る額、如何にも気真面目そうな太い眉。そして学校一の長身の少年。俊介と徹司は幼馴染で仲の良い親友同士だった。

「ちょっと待て、ってば」

俊介は机の中の物を全て取り出した。机の上が教科書やプリント類で乱雑に散らかる。

「何処にやったんだっけなあ。絶対、学校にある筈なんだけど」

俊介は首を捻った。「持って帰った記憶もないし」

「それより何だよ、この引き出しの中は。自分の机なんだからもう少し整理整頓したらどうだ」

徹司は呆れた様子で教科書を手に取ると、親友の頭を軽く叩いた。俊介が眉をしかめる。

「いてえなあ。別にいいだろ、俺の机なんだから。誰にも迷惑かけてないんだし」

「今現に、こうして俺が迷惑被っているじゃないか」

小言を言いながらも、徹司は机の上の物を、一つ一つ整理していた。「全く、何で俺がこんなことをしなきゃならないんだ」

「やっぱり無いか」

几帳面に積み上げられた教科書やプリントを前に、俊介は頭を掻いた。「失くしたのかな」

「失くしたのかな、じゃないだろ。どうするんだよ」

「あの」思い切って奏子は二人に声をかけた。その声は少し上ずっていた。

俊介と徹司が同時に奏子の顔を見る。奏子は身体中が赤くなるような気がした。

「何か大切なものの、探し物って」

「ああ」徹司は頷いた。「進路調査書だよ。今日中に提出しないと、部活に行かせてくれない、ってフグタが五月蠅くてさ」

フグタとは担任の福田教諭のことだった。丸々と太っているので生徒達からはフグタと呼ばれている。

「調査書？ まだ出していなかったの？」

流石に奏子も驚いた。提出期限は夏休み明けだった。

俊介は拗ねたように唇を尖らせた。「まだ二年生なんだから急いで出す事ないじゃないか。大体、進路なんてまだ何も考えてないし」「そんな訳にはいかないだろ。三年は進路別のクラスになるんだから」

彼らの通う高校は、三年生から進学先別に国公立コース、私立理系・文系コース、短大・専門学校コース、その他と、五つに分かれてクラス編成が行われる事になっている。

徹司は俊介の方を顎でしゃくった。「お前のせいで、俺まで連帯責任取らされるなんて嫌だからな」

「用紙を失くしただけなら、職員室に行って新しい物を貰ってくればいいんじゃないの」

「フグタに二重で怒られるなんてやなことだ」

俊介は子供の様に頬を膨らませた。

「しょうがないだろ。諦めて説教喰らいやがれ。悪いのはお前なんだから。三沢さんもそう思うだろ？」

不意に自分の名を呼ばれた奏子は思わず徹司を見つめた。「私の名前知っているの、篠原君？」

徹司は当惑したように首を傾げた。「当り前だろう。それに三沢さんだって今俺の名を呼んだじゃないか」

だって、篠原君は小塚君といつも一緒にいるから。頭の中にふと浮かんだ言葉に、奏子は再び俯いた。

「とにかく何時までもこうしてたってどうにもならないんだ。もう諦めろ」

徹司は俊介の腕をぐいと掴んだ。「ほら、行くぞ」

「分かったから放せよ」

「駄目だ。お前は逃げ足が速いからな」

俊介は脹れっ面のまま、十センチは背の高い徹司に引きずられるようにして教室を出て行った。扉まで見送ると、何人かの生徒が二

人に声をかけていた。賑やかな笑い声が廊下に響く。その中には女子生徒の姿もある。

俊介も徹司も、バスケット部のエース部員であり、明るく気さくな彼らは同級生ばかりでなく後輩の生徒たちからも人気があった。

私なんかが出る幕は無い。今までも、これからも。奏子は唇を噛んだ。

力なく教室に戻った奏子は、机の上に山積みになれたままの教科書やノートにそつと触れた。周りに誰もいないことを確認すると、「数学？」のシールが貼られた一冊の大学ノートを手に取った。筆圧の高い、少し角張った文字や記号が並んでいる。そしてノートの右下には、パラパラ漫画がみっちり書き込まれていた。

奏子の頬が緩んだ。「意外と上手いのね」

ノートを元の位置に戻すと、俊介の斜め後ろの自分の席に座った。目を閉じ、俊介の後姿を思い出す。

朝練のある日は決まって五時間目に船を漕いでしまうこと。苦手な英語の授業の時には、先生に当てられないようにと必死に猫背になっっていること。

校庭から聞こえる大歓声の中、奏子は俊介との他愛も無い会話を何度も反芻はんすうしていた。

秋の日差しは既に短くなっていた。ビルの窓に映る西日が眩しい。奏子は手を額に翳かざし信号待ちをしていた。帰宅ラッシュが始まっており、交差点には車が忙しなく行き交っている。

信号が青に変わり、足を踏み出した。人波に揉まれるように家路へと急ぐ。八車線の横断歩道を半ばまで進んだところで、「三沢」と呼ばれた様な気がした。一瞬立ち止まったが、気のせいだろう、とまた歩みを進める。横断歩道を渡りきったところで、もう一度自分の名を呼ぶ声が聞こえた。

「三沢！」道路の向こうから全速力で走り寄って来る制服姿の少年。「小塚君……」奏子の鼓動は高鳴った。

小塚君が、私の名を呼ぶだなんて、一体何があったというのだろう。奏子はその場で足を止めた。交差点を引き返したかったが、生憎信号が点滅しだした。

「おい、三沢。ちょっと待ってくれ！」

確かにそう聞こえる。逸る心を抑えながら、次の青信号を待とうとしたが、俊介は信号を見ていないのか構わず交差点を突っ切ろうとする。

「駄目よ、小塚君！」

横断歩道の信号は赤になり、車が動き出した。

クラクションの音に立ち止まった俊介。

「危ない！」奏子は叫んだ。

何かがぶつかった、ドスンという鈍い音。俊介の身体がスローモーションのように宙に舞う。

「小塚君……？」

耳をつんざくブレーキ音。交差点内に響き渡るクラクション。人々の叫び声。

「男の子撥ねられたぞ！」

「早く救急車を！」

横断歩道から数メートル先の道路の上に、うつ伏せのまま微動だにしない学生服姿の少年。その頭からは大量の血が流れ、アスファルトを赤く濡らしていく。

「嘘よ……」奏子の視界が大きく歪む。何も聞こえず、何も考えられない。

奏子は糸の切れた操り人形の様に、その場に崩れ落ちた。

病室のベッドの上で目を覚ますと、涙が流れていることに気付いた。枕も少し湿っている。

またあの夢か。

三沢奏子はゆっくりと上半身を起こした。痩せ細った左腕には点滴が繋がれている。肘と手の甲は針の痕で黒ずんでいた。

サイドテーブルの上に置かれた鏡を覗きこむ。そこには肌の艶もハリも失われ、明らかに死期が近い、まるで老婆の様な顔があった。奏子は首を振り鏡を伏せると、薄くなった髪を隠す為のバンダナを結び直した。今更外見のことなど気にしてはいないが、見舞客などに哀れみに満ちた視線を向けられることが嫌だった。

小塚俊介が交通事故に遭い死亡してから二十年が経つ。同級生の奏子は三十七歳になっていた。そしてこれ以上年齢を重ねる事も無く、人生を終えようとしている。奏子の身体は末期癌がんに侵おかされていた。

俊介の死に様を目の当たりにしてから、奏子の人生は大きく変わった。あの日以来、事故現場をどうしても見る事が出来ず、通学が困難になった。何よりも俊介の死の原因は自分にある、と感じていた奏子は、他の生徒との交流が持てなくなり、家に引き籠るようになった。そして一年間の休学の後、高校を中退した。

人と関わることが恐ろしくて仕方がなかった。事情を知る両親は、一人娘の奏子に対し、同情的で理解も示してくれたが、二十歳を過ぎる頃には「いい加減にしろ。小塚君が死んでも、お前はこれからも生きていくんだぞ。何時までもそんなことでどうする！」と激しく叱責するようになった。それが正しい意見だと頭の中では理解出来ても、心に深く刻まれた、あの恐怖と絶望を拭い去ることが出来なかった。そして何も変わらないまま更に年月が過ぎた。

奏子が二十代半ばに差し掛かった頃、母親、そして父親と、両親が相次いで病で他界した。両親の残してくれた財産は葬式代に墓代、当面の生活資金などであっさりと消えた。奏子は覚悟を決めて仕事を探し始めた。だが高校中退の奏子を雇ってくれる企業は、不景気の折それ程の数もなく、十数度の面接の後、やっと勤める事が出来た会社は、皮肉にも損害保険会社の外交員だった。元来引つ込み思案で人付き合いが苦手な奏子の営業成績は当然のように振るわなかった。小さなアパートで独り暮らしにも何かと金がかかる。生活は間もなく逼迫ひっばくした。

そんな折、勤務先のある男性と深い仲になり、周りに勧められるまま結婚した。だが、結婚生活は長くは続かなかった。

「何時までも死んだ男と俺を比べるのはやめてくれ。俺は俺で前のことを考えているじゃないか。一体、俺の何が不服なんだ」

夫の言葉に、奏子は何も反論出来なかった。決して夫に不満があった訳ではない。一回りも年上の夫は、人当たりが良く、包容力のある男だった。何より、奏子のことを理解しようと努力してくれていた。だが、あの事故から十年以上の月日が流れても、奏子の心の中には、人懐こい笑顔を向ける小塚俊介が住み続けていた。

そして奏子は自分から離婚を申し出た。夫は何も言わなかった。

二年間の夫婦生活に終わりを告げ、新たな人生を歩み始めようとした矢先、奏子は体調を崩した。大学病院の検査結果は、子宮癌だった。子宮を摘出し、リンパ節郭清かくせいも行った。女性としての機能の多くを失ったが、気は楽になっていた。

これで思い出だけを胸に抱いて生きていける。

数か月の療養を経て、新しい仕事を見つける事も出来た。離婚と大病を乗り越えたからなのか、積極的になり、知り合いも増えていった。奏子にとってそれが本当のスタートの筈だった。

だが数年後、癌は再発した。肺など身体中に転移し、手を付けられる状態ではない、と医師に宣告された。現在奏子はホスピスに入所している。

死に対して漠然とした不安はあるものの、恐怖や絶望は感じていなかった。むしろ、病気という抗えない現象で死を迎える事が出来るのなら、それはそれでいい、と考えていた。十七歳という、これから幸せな人生が始まる筈だった俊介が、交通事故という形で突然の死を迎えた事に比べれば、決して不幸な終末ではない。

奏子は引き出しから古い写真を取り出した。高校一年生の体育祭の時に同級生が撮ったものだ。ピースサインの同級生たちに混じって、同じフレームに納まる笑顔の俊介と奏子の姿。

今の奏子にとって、唯一の宝物だった。

門番

真新しいホスピスの個室は八畳ほどの広さがあり、ピンクベージュを基調とした落ち着いた内装はちよつとしたホテルの様な作りだった。糊の効いた花柄のシーツが掛けられたリクライニング式のベッドと、木目調のサイドテーブルは大きな窓に沿って配置され、出入り口の横には洗面所、壁際には白い二人掛けのソファとローテーブルが置かれている。

奏子はベッドに横たわったまま、一人窓の外の景色を眺めていた。「おい。調子はどうだ」

部屋の中央に、何の前触れもなく黒い燕尾服姿の若い男が現れた。「死が迫っている人間に、身体の具合を訊ねるほど不毛な事は無いが、お前たち人間は社交辞令というやつを重んじているようだからな」

奏子は特に気を悪くするでもなく「そうね」と答えた。手元のポタンを操作し、ベッドを起こす。背凭れに体重を預けると軽く息をついた。「確かに挨拶は大切だわ」

「そうか。つまらない習慣だがな」

流暢な日本語を話す男は、冷めた表情のまま首を傾げた。その肌は抜けるように白い。少しつり上がった目に形のいい薄い唇。ブルグレイの瞳にかかる艶やかな黒髪。人間ならば二十代の半ば、といったところだろうか。

「大体、こんな処に入院している人間に、元氣かと問うことに何の意味がある。ここにいる患者は遅かれ早かれ、全員死ぬことが決まっているんだ」

「そう言われると身も蓋も無いわね。でも人間なんてそんなものなのよ」

奏子は苦笑した。「それに私には、あなたが死神だ、ということの方が、未だに不思議で信じられないわ」

「お前が信じてても信じなくとも、俺が人間ではない事に変わりはない」

死神と称する目の前の男が、奏子の前に姿を現してから一カ月近く経っている。その時も同じように突然部屋の中に現れた。

「お前が三沢奏子か」

見知らぬ外国人の訪問者は、抑揚のない低い声で奏子を一瞥いちべつするなり言った。「成程、確かに寿命はじきに尽きるようだな」

恐ろしく整った顔立ちだが、その表情は、何処か人を小馬鹿にしているようだった。

驚きのあまり声も出ない奏子の事など気に留めることなく、男は続けた。「本来なら俺の出る幕ではないのだが、これも仕方ない」
「あ、あなたは一体……」奏子は喉をゴクリ、と鳴らした。「だ、誰なの」

男は腕を組み、唇の端を僅かに上げた。「俺は人間が言うところの死神だ」

「死神ですって？ 何を馬鹿な事を言っているの」

「これが証拠だ」

奏子の言葉を遮るように、燕尾服の背中から伸びた漆黒の翼。エナメルのような質感の大きな翼は部屋一杯にまで広がり、男の身体がふわりと宙に浮いた。

「嘘……」 俄には信じ難い場景に、奏子は何度も目を擦った。

「お前も知っている様に、お前はもうすぐ死ぬ。死神が現れたって何の不思議もないだろう。それにお前たちの考え方では、死が迫っている人間に憑りつくのが死神ではないのか」

「ちょっと待ってよ。いきなりそんなことを言われても……」

混乱する奏子をよそに、「これで解っただろう」と言うと、背中
の翼は音も立てることなく一瞬で消え去った。

「俺たちがお前を看取ってやる。有り難く思えよ——」

それがこの男との初めての会話だった。

「それで、今日はどんな用？ まさか本当にご機嫌伺いに来た、っ

てわけじゃないんでしょう」

「当たり前だ。俺たちはそんなに暇じゃない」

男はソファーに腰を下ろすと、ゆっくり足を組んだ。それは体重など感じさせぬ、軽やかで優雅な動きだった。

「ただの報告だ。お前はあと……」

その時、ノックの音が響いた。

「こんにちは、三沢さん」

花束を抱えた篠原徹司が顔を出した。屈むようにして個室の扉をくぐる。きつちりスーツを着込んでいるが、少し窮屈そうだった。

「調子はどう？」

相変わらず短く刈られた髪と、よく陽に焼けた顔から白い歯を覗かせている。

「また来てくれたの。いつもありがとう」

奏子は微笑むと、パジャマの襟元を整え、バンダナの位置を確認した。

「三沢さんが気にすることはないよ。近くの公民館で会合があったから、ついでみたいなもんだし」

「それでも嬉しいわ」差し出された花束を受け取った。

大学時代はバスケットボール選手として活躍したという徹司は、その後体育教師となった。現在は彼らの母校に勤めている。初めてその事を聞いた時、教職に就くとはいかにも実直な徹司らしい選択だと納得した。

「どうしたんだ。目が赤いみたいだけど、何所か痛むのか？」

「うつん」奏子は首を振った。「さっき、昔の夢を見ていたから」

「そうか……。そうだろうな」

徹司は慣れた仕草で傍のパイプ椅子に腰かけた。

「体育祭か」サイドテーブルの写真に気付いた徹司は懐かしげに眼を細めた。「あれからもう二十年か。時間が経つのは早いもんだな」明日は俊介の二十回目の命日だった。

高校を中退する前、徹司は友人たちとともに、何度か三沢家を訪

問していた。事故を目の当りにして外出出来なくなった奏子に対し、彼らは俊介の死は奏子の責任ではなく、あくまでも不慮の事故だと慰め励ました。

だが小塚俊介の突然の死は、親友である徹司にとっても、同級生の彼らにとっても、強い衝撃と深い悲しみを与えていた筈だった。

徹司が地方の大学に進学してからは疎遠になったが、徹司の祖父が偶然奏子と同じ病院に入院していたことで再会し、ホスピスに入所した今も、時折こうして奏子を見舞っている。

「篠原君はお墓参りに行くんでしょう？」

「ああ。毎年の事だしな」

「そうよね。本当は私も行きたいんだけど……」

身体に繋がれた点滴を見つめた。今の奏子は、墓参りどころか日課だった中庭を散歩することもままならぬほど、身体が衰弱している。薬のおかげで苦痛は殆ど感じないが、病は確実に奏子の身体を蝕み、死に向かわせていた。

奏子の様子に、徹司は「無理しなくていいよ」と頭を振った。

「大丈夫だよ、三沢さん。俺が三沢さんの分までちゃんと手を合わせてくるから。それにほら、こんな歌あるだろ。私のお墓の前で泣かないで下さい、千の風になって大きな空を吹きまわっています、って。だからあいつを悼む気持ちさえあれば、墓参りするかどうかなんて、大した問題じゃないよ」

そう言って奏子の痩せ細った手を握った。「だから、三沢さんも頑張って」

徹司の顔を見るのもこれが最後になるかもしれない。奏子はふとそう思った。長い間、気にかけてくれている徹司に、辛い顔は見せたくはない。奏子は精一杯の笑顔を作ってみせた。「ありがとう、篠原君」

チラとソファの方をみると、燕尾服の男は二人の話など興味がないように腕を組み目を閉じている。奏子は安心して話を続けた。

三十分ほど、徹司の教師生活の話などを聞いていた。顧問を務めるバスケット部の生徒たちの事。同僚教師の失敗談。腕白盛りの自らの子供たちのこと。他愛のない話で、奏子の気持ちを少しでも和ませようとしているのを、奏子は手に取るように感じた。

「——それじゃあ、もう帰るよ。あまり長居しても疲れるだろうし、ゆっくり休んで、体力つけろよ」

「ええ。篠原君もお仕事頑張ってね」

立ち上がった徹司はソファに座っている燕尾服の男の存在に気付く事もなく、側を通り過ぎる。

病室のドアに手を掛けた時、徹司は振り向いた。何か言いたげに唇を動かす。

「どうしたの？」

「あのさ、あの時どうしてあいつが……。いや、なんでもない」

言葉を切ると、頭を振った。「また来るよ」

奏子は黙って頷き、大きな背中を見送った。

徹司が訊ねたいことの想像は付く。そしてそれは奏子自身、一番知りたいことでもあった。

あの時、俊介は何故、奏子の後を必死に追っていたのか——。その理由を考える度に、奏子の胸は強く締めつけられた。ただの連絡事項だったのか、それともどうしても伝えたいことがあったのか。

ひよっとすると、俊介は恋の告白するつもりでいたのではなかったのか。奏子はそんな甘い願望を拭い去ることが出来ずにいた。だがその度に、忘れたくても忘れられない記憶が甦る。

奏子は頭を掻きむしった。バンダナが落ち、点滴の管が引っ張られる。

「小塚俊介が何故死んだのか知りたいのか」

男の声に顔を上げた。ブルーグレイの瞳は奏子に向けられている。

「ええ。でも……」

「どうした。やはり知りたくないのか」

奏子はゆっくり首を振った。「そうじゃないの」

どんなつまらない理由であつてもいい。それを知る事が出来ればどんなに気が楽になるだろう。そう思っていたが、真実を知る俊介は、既にこの世にはいない。奏子はサイドテーブルの上の花束を手にとると、黄色い花卉にそつと触れた。甘い香りと柔らかな感触が伝わる。

「ねえ、死神さん。本当に私以外の人には見えないのね」

燕尾服の男は「何を今更」と前髪を掻揚げた。「医者も見舞客も、俺たちの存在に気付いた人間はいないだろう」

この一月の間に、彼らは何度もこの部屋を訪れていた。男がベッドの端に座り込んでいても、医者 of 脇に立ってカルテを覗きこんでも、誰もその存在には気付かない。彼らの話声も周りには全く聞こえないようだった。

「と言つても、お前以外の人間には全く見えない、ということはない。周りの人間全てに人間として姿を見せる事もある」

「本当？」奏子は目を丸くした。「だけど、その格好じゃ目立つでしょう」

「そんなことはない」

「それに人間のふりをしなくっちゃ、おでんも天麩羅も食べられないしね」

別の男の声が足元から聞こえた。

「おでん？」

「そう。玉子と大根が最高だよ。あと、茶碗蒸しも捨て難いかな」純白のフロックコート姿の男は、先程まで徹司が座っていたパイプ椅子に凭れかかった。軽いパイプ椅子がその重みに傾く事はない。「あら、今日は天使までお見舞いに来てくれたのね」

「そう。身体の調子はどうかな、って。でも良いなんて事は間違つても無いだろうけど」

肩にかかる金髪は緩やかなウェーブを描いている。天使と呼ばれた男は、燕尾服の死神とは対照的に表情が豊かで饒舌^{じょうぜつ}だった。

「ということば、いよいよ私が死ぬ時が近づいたということかしら」
金髪の男は満面の笑みを見せる。「話が早くていいね、奏子は。やっぱり病気で死ぬ奴の方が仕事がやり易くていいや。事故や突然死の奴らはなかなか自分の状況を理解してくれないからね」

「あら、天使がそんなこと言っているの」

「別に構わないよ。天使だの死神だの、そんなもの人間が勝手に付けた呼び名だから。ただ、説明が面倒だから、人間には死神とか天使、って言い方をするんだけど」

「じゃあどう呼べば、あなた達の存在に一番相応しいのかしら」

奏子は二人の男の顔を交互に眺めた。

「そうだなあ」金髪の男は顎に人差し指を当て、黒髪の男の顔をちらりと見た。「どう言えればいい？」

「俺たちは門番だ」

「門番？」奏子は首を傾げた。

「お前も直に意味が解る」

黒髪の男は相変わらずソファーに腰を掛けたまま、素気なく答えた。

「じきに……」

奏子は男が先程言いかけた言葉を思い出した。「ねえ、死神、いえ、門番さん。さっきの話の続きだけど――」

黒髪の男は間髪を入れずに言った。「お前は明日死ぬ」

「明日……」思わず絶句した。手の中の花束がするりと落ちた。

死神の男は奏子の強張った顔など意に介する事もなく、淡々とした調子で続ける。「明日の朝、お前の容体は急変する。そして夕方五時、脳と身体の活動は全て止まる」

「明日の夕方五時……」

二十年前、奇しくも小塚俊介が死んだ同じ日、同じ時刻にこの命が終わるとは、何という皮肉なのだろう。それともこれは正しく「神」の思し召しなのだろうか。奏子は大きく息を吐いた。

金髪の男は奏子の肩を軽く抱いた。「大丈夫だって。悩んでも人

の寿命はみんな決まっているんだから」

俯く奏子は、男の体温のない身体と重みのない腕に、この二人が人間ではない事を改めて実感した。

「今夜が私の人生最後の日になるのね」

奏子は三階の窓から見える景色に目をやった。爽やかな秋風に葉を揺らす木々。夕焼けに覆われていく高い空。微かに漂う金木犀の香り。大通りから聞こえてくる子供たちの声。二十年前、教室の窓から眺めていた風景と変わらない。奏子の名を呼ぶ俊介の声も、教室で交わした言葉も、まるで昨日の様に鮮明に思い出す事が出来る。だがそれも今夜が最後。奏子の目は僅かに潤んだ。慌てて袖で拭う。泣いたところで運命は変えられない。受け入れるしかないのだ。そう、小塚俊介の死という現実には絶対に覆らないように。

名前

「ねえ、死神……、いえ、門番さんたち。あなた達の名前は何ていうの？」

奏子は努めて明るいい声で尋ねた。誰かと会話をするのもこれが最後だろう。明日の今頃には二人に看取られながら死に逝く。たとえそれが天使と死神であろうと、門番であろうと、最期の時を共に過ごしてくれるという二人の名を知りたいと思った。

金髪の男は奏子の気持ちを察したかのように床に落ちた花束を拾い上げると、ベッドの上に腰を掛けた。

「名前？ そんなものを聞いてどうする」

燕尾服の男は眉を顰めた。「名前なんて個々を区別する為の、ただの記号に過ぎないだろう」

奏子はおどけた様に、人差し指を天井に向かってピン、と立てた。

「記号だって何だっていいじゃない。あの世に旅立つ時の挨拶が、サヨナラ門番さん、じゃあまりにも愛想が無いと思わない？」

「下らない感傷だな」

「あのさ」金髪の男が奏子の顔を覗き込んだ。

白磁の様な肌と紅い唇に、奏子は少し気後れする。「ど、どうしたの」

「奏子。僕たちは人間みたいに決まった名前はないんだよ。だから奏子が好きなように呼べばいい」

「名前が無い？ じゃあ、あなた達はお互いをどう呼び合っているの」

「うーん。あまりそんな機会も必要もないからなあ。ああ、でもこの間二人で居酒屋に行った時にはこう呼び合ったよ。僕が金田で、あっちが黒田。普通のサラリーマンみたいでいいだろ？」

そう言って自分の髪を無邪気に摘んで見せた。自分たちの髪の色からとっただけらしい。

「安直だけとかえってあなた達らしいわね。でも、そんな風に呼び合ったって、とてもあなた達は居酒屋通いをする普通のサラリーマンには見えないわよ」

「お前が気にする事では——」

「まあまあ。明日の今頃には奏子は死んじゃうんだしさ。ちょっと位お喋りに付き合っただけよ」

金髪の男の宿めるような言葉に、黒髪の男は渋々といった様子で脚を組み直した。

「ありがとう、門番さんたち。でも、いくらなんでも金田に黒田はないわね。私が好きなように呼んでいいのなら、死神は全身黒ずくめの烏からとってクロウ、なんてどうかしら。外人さんばいし、洒落てるでしょ」

黒髪の男は「好きにしろ」と言っただけで再び黙り込んだ。

奏子はその様子に満足げに頷いた。「どうやら気に入ってくれたようね」

「じゃあ、僕の事はどう呼ぶんだい？」

緑色の瞳が奏子の目をじっと見つめる。「言っただけじゃない？」

「あなたは……」霧がかかった様に視界が揺れた。一瞬気を失ったかのような感覚。

「どうした？」金髪の男が訊ねる。

「いえ」貧血だろうか。それにしても妙な気がする。奏子はゆっくり頭を振った。「少し眩暈がしただけ。ごめんなさい。……あなたはそうね、ベリル、なんてどうかしら」

「ベリル？ 緑柱石キョウジュイシの事かい？」

「ええ。あなたの瞳はエメラルドの宝石みたいだから」

「そうかい？」金髪の男はバンダナを拾うと、奏子の頭に結わえ直した。「それじゃあ奏子はこれから僕たちの事をクロウとベリルと呼んでくれ。いいね」

「ありがとう。ベリル。クロウ」

奏子は二人に向かって軽く頭を下げた。

「どういたしまして」

ベリルは指揮者の様に恭しくお辞儀をした。

「とは言え私にはあと数時間しか残ってないのね。なんだか妙な感じだわ」

「せいぜい残された時間を満喫する事だな」

奏子は苦笑した。「そうね。身体はあまり動かせないけど、こうして話は出来るんだもの。是非そうさせて頂くわ。じゃあ、早速さっきの質問の続きだけど、あなた達みたいに華やかな人が、どうやってサラリーマンのふりをするの？ 目立って仕方ないと思うんだけど」

ああ、とベリルは奏子の足元に腰を下ろした。

「あのね、奏子。僕たちは確かに人間ではないけど、今こうしてこの部屋にいるように、決められた時間だけ、人間と同じようにこの世界に存在する事が出来る。じゃないと仕事にならないからね。当然、人間と同じものを食べることで、料理の味を楽しむことだって出来る。でもその間もあくまでも『人間』に良く似た外見の、別の存在なんだ。これは解るかい？」

奏子は少し首を捻った。「別の存在なのに、人間の食事が必要なの？」

「いいや」ベリルは首を振った。「食べる必要はない。ただの楽しみだよ。人間だって生命を維持する上で必要もない酒を飲んだり、煙草を吸ったりするだろう。同じことだよ」

「それなら納得できる気がするわ」

そうは言ったものの、この二人が居酒屋でおでんや天麩羅に箸を伸ばしている姿はとても想像出来なかった。

「奏子の言うように、この日本では目立つかもしれないけれど、僕たちは自分の存在感というものをコントロールする事が出来るんだ。例えば、居酒屋に行って客として扱われても、周りの人間は僕たちと他の人間との差異は解らないし、限りなく存在感を希薄にすれば、この部屋に出入りする奏子の友達や医者も全く僕たちに気付かない

ようにね」

「それじゃあ、この世界には、私たちが気付かないだけで、人間のふりをしたあなた達のお仲間が沢山いる、ってこと？」

「そうだよ。ただ、みんな気が付かないだけさ。見えない事と存在しない事とは違うからね」

「ということは、このホスピスも死神……、いえ、門番たちがゴロゴロ存在しているの？」

クロウとベリルは目を見合わせた。クロウは黙って首を横に振る。「少なくとも、今この場所にいるのは俺たちだけだ。それ以上は答えられない」

どうして、と訊き返そうとする奏子をベリルが制した。「職務遂行上の守秘義務ってやつだよ」

「あなた達でもそんな決まりごとがあるの？」

奏子は意外そうに尋ねた。

「まあね。俺たちの世界にも秩序ってものがあるから。その辺は人間界と変わらないよ。ま、これも詳しくは話せないんだけど」

「それだけ聞けば、あなた達の世界も、人間の世界も、そうは変わらない気がするわ」

「まあ、そこら辺はね」

ベリルは肩をすくめた。「これも仕事だし」

「じゃあ、あなた達は天使と死神としての仕事を失敗したことなんてある？」

「俺はミスなんてしない。だが、たまに失敗する奴も、いない事は無い」

クロウはベリルの顔をチラリと見たが、当の本人は素知らぬ顔をしている。「呑気な顔をしゃがって」

「気にすること無いわよ、ベリル。誰にだって失敗はつきものなんだから」

微笑む奏子に、ベリルは「まあ、失敗というか、なんというか」と複雑そうに頭を掻いた。

「その失敗の尻を拭かされる方は堪らないけどな」

組んだ足に肘をつき、溜息混じりに言ったクロウに、奏子は思わず声を上げて笑った。こんな風に笑うなんて何か月ぶりだろう。いつの間にか、奏子はこの二人との会話を本気で楽しんでいた。

「いつも冷静沈着なクロウでもそんな風に思うことがあるのね」

「放っておいてくれ」

クロウは苦々しく呟いた。「全く、人の気も知らないで」

「あら」奏子は首をオーバーに傾げた。「人間じゃない、って言うたのはクロウの方よ？」

クロウは鼻梁に皺を寄せると、ますます仏頂面ぶつていめんになった。

「そんな顔を見ると、やっぱり門番さんも人間臭い処があるのね、って思っちゃう」

再び、ノックの音が部屋に響いた。個室の扉が静かに開く。

「三沢さん。夕食の時間ですよ」

看護助手の中年女性が顔を覗かせた。その手には食事が載せられたプラスチック製のトレーと、小振りのポットがあった。「おじやましますね」

「いつも有難うございます、多嘉子たかこさん」

「いいえ。お礼を言われるような事じゃありませんよ」

ピンク色の上下を着た多嘉子はいかにも人のいい笑顔を見せると、慣れた仕草でトレーをサイドテーブルに運んだ。トレーの上には、大学病院で出されていた素気ない食事とは異なり、入所者一人ひとりの好みに合わせた、彩りのよい食事が並んでいる。

「肉じゃが、か。美味しそうだね」

ベリルは座った姿勢のまま身体を宙に浮かべると、ベッドの上の空間でゆっくりと身体を回転させ、手を振って見せた。その仕草に奏子は目を細める。

「今日は顔色がいいわね。何かいい事でもあったのかしら？」

多嘉子は湯呑にポットの中の熱い茶を注ぐと「どうぞ」と奏子に手渡した。

「そんな風に見えますか？」

「ええ。とても楽しい事があつたみたいよ」

茶を啜る奏子の顔は、長時間話し続けた興奮で上気していた。

「よければそのお花、活かしておきましょうか」

膝の上に置かれた花束に気付いた多嘉子はそう言うと、サイドテーブルの下に置かれたガラス製の花瓶を取り出した。ここに入所した当時、徹司が花束とともに買い与えてくれたものだ。

「ええ、お願いします」

「ちよつと待っててね」

多嘉子は洗面所で花瓶に水を溜め、形よく花を活けると、クロウの目の前のテーブルのちょうど真ん中に飾った。するとベリルは部屋の中を泳ぐように移動し、花瓶の横に物音一つ立てずに腰をおろした。得意げなその表情は、悪戯好きの子供の様でもあつた。

「例の彼からのプレゼントね。三沢さんもやるじゃない」

クロウとベリルの存在に気付かぬ多嘉子は、腰に手を当てテーブルの上の花を眺めた。

「もう、多嘉子さんたら。知っている癖に」奏子は苦笑した。

「そうかしら。それだけじゃないと思うわよ」

からかうように微笑む多嘉子は、既に六十近い筈だが、若々しい立ち姿と竹を割ったような性格で、患者のみならず職員の中でも人気のある女性だった。奏子もこの多嘉子が身の回りの世話をしてくれることに感謝している。

「何度も言うように、篠原君は高校時代のただの同級生ですから。

多嘉子さんが思うような人じゃないですよ」

「はいはい。高校生の時からお付き合いのある、仲のいいご友人なんですネ」

「もう、あまり茶化さないで下さい」

奏子は食事をとりやすいように、サイドテーブルの天板を胸元まで動かした。トレーに並べられた小鉢の中には、奏子の好む料理が少しずつ盛られている。肉じゃが、胡麻豆腐、春菊のお浸し、玉葱

の味噌汁、そして松茸御飯。

これが最後の晚餐か。そう思うと奏子の胸は締め付けられるように痛んだ。

「どうかしたの？」

「いえ。何でも。もう松茸の季節なんだな、と思って」

奏子は慌てて箸を握った。そろそろと食事を口に運ぶ。「……美味しい」

「そう、良かったわね」

多嘉子は安心したように微笑んだ。「とにかく体力勝負ですからね。少しでも沢山召しあがって頂戴ね」

「ええ。そうですね」

「良かったらテレビでもつけましょうか」

ソファアの横のキャビネットの上には小さなテレビが置かれているが、奏子は首を横に振った。「いいえ。このままで結構です」

「そう。じゃあ、また後でね」

多嘉子は軽く手を振ると、部屋を後にした。他の入所者の世話がまだ残っている。

「相変わらず忙しい人間だな」

扉に目を遣ったクロウは小さな声で言った。

「働き者だから長生き出来るんだよ」

「まあ、それもそうだろうな」

何の変哲もないやり取りだが、ベリルとクロウが言うのなら、間違いなく多嘉子は元気で長生き出来るのだろう。両親を早くに亡くしている奏子にとってそれは朗報だった。

良かった、と呟く奏子に、ベリルは組んだ足をブラブラさせながら声を掛けた。「どうした、奏子？」

「うつん。大したことじゃないの」

ベリルは小首を傾げた。「ふうつん。何でもいいけど、ちゃんとご飯は食べなよ」

「そうね。今夜は好物ばかりだから」

食欲などとうに失くしていた筈なのに、不思議なほど食が進む。

奏子は食事の味を堪能しつつ、全てを平らげた。

「ご馳走さま」箸を置き、手をきっちりと合わせると、奏子は以前、徹司が話していたことを思い出した。

「医者がうちの爺さんもあと二、三日しかもたないだろうからって、外泊許可を出したんだ。爺さんもずっと最期は家で過ごしたい、って言うってたからな。それで実家の方に戻って来たんだけど、爺さんは亡くなる前の晩、将棋仲間を四、五人家に呼んで、すき焼を肴にビールまで飲んでいたんだよ。それはもう旨そうにね。俺たち家族一同目を剥いて驚いたよ。医者の見立ては間違いじゃないのかってね。でもさ、次の日、昼飯にうどんを食べた後、昔から爺さんが昼寝をする時の習慣なんだけど、縁側に座布団を敷いて寝転がったんだ。気持ちよさそうに寝息を立てているかと思ったら、いつの間にか息を引き取っていてさ。びっくりしたけど、ああ、うちの爺さんはいい人生を送ったんだなあ、これが大往生っていうものなんだろうな、って親父もお袋もなんか納得しててさ。それで俺も、こういうのが人間の死っていうものなんだろうなって少し考えたんだ」

ホスピスに入所した翌日、中庭で見舞ってくれた徹司はそう言うのと、複雑そうな顔で車椅子に座る奏子の顔を見た。恐らく、親友だった小塚俊介の突然の死と比べて出た言葉だったのだろう。だが奏子はそんな徹司に不快感は覚えなかった。

「ねえ、篠原君。私はまだ三十七歳だけど、死ぬには早すぎるとは思ってないの。色々あって、それこそ死んでしまいたい時も何度もあったわ。でもその度に篠原君や周りの人たちが勇気付けてくれた。死んだ両親も心底心配してくれていたわ。それにもし、ここで私が自殺なんてしたら小塚君に申し訳ないって本気で思ったの。だから私の事をそんな風に気遣わないで。少なくとも、私だって一度は結婚もしたし、人並の人生は歩んだ筈なんだから。それに癌なんて、誰にでも起こりうる病気だもの。私だけが特別な訳じゃないでしょう」

「ああ。そうだな」徹司はそれ以上何も言わず、奏子の座る車椅子を押し始めた。

二人は初夏の風が吹くホスピスの敷地の中をゆっくりと移動し、季節の花々の咲き誇る姿を眺めた。

「今日はありがとう。……また来てくれる？」

夕暮れも迫った頃、奏子はベンチに座る徹司の横顔に尋ねた。その顔はゆっくりと奏子の方に向くと、「当り前だろ」と大きく頷いた。

「俊介の事はもう気にするな、って言っても無理かもしれないけど、今は三沢さんがどうすれば少しでも長く生きられるかを考えろよ。それが俊介に対する最後の駄賃だと思うから」

そう言っていると俊介は遠くを見るように目を細めた。「無責任な科白かもしれないけどさ」

「うっん」奏子は首を振った。「そう言って貰えると嬉しいわ」

その日から四カ月余りが経った。徹司は仕事の合間を縫って、十日から週に一度のペースで奏子を見舞うようになっていた。見舞ってくれる度、他愛のない会話と、近くの公園までの散歩で楽しませてくれた。徹司と話すと、俊介への切ない想いばかりではなく、楽しかった高校生活の思い出も語り合えることが、何より嬉しかった。「人間って不思議ね」奏子はぼつりと呟いた。

「不思議？」クロウとベリルの二人は、同時に同じ方向に首を傾げた。

「どういう意味だ？」

クロウは形のいい眉の片方を少し上げた。

「そのままの意味よ。あなた達みたいな存在には理解できない感覚でしょうけど」

奏子は苦笑した。恐らく人間の生死を知り得る「門番」という存在には、人間の些細な行動の意味や心の機微きびは理解してもらえないだろう、そう思った。

「まあ、不思議かどうかはともかく、変わった人間も確かにいるな」

クロウは奏子にちらりと視線を寄越した。

「変わった人間？」

「ごくたまにいますんだ、そういう人間が」

「意味が解らないわ」

「解らなくてもいいんだよ。明日には答えが出るんだから」

ベリルは奏子の傍まで歩み寄ると、優しく微笑み、その手を奏子の額に当てた。

「少し休みな」

「どうしたの——」

言い終わらないうちに、奏子の視界は急速に闇に包まれていった。奏子の上半身がベッドに凭れたままだらりと傾く。奏子の意識は完全に失われていた。

「眠ったか」クロウはすつ、と立ち上がった。

「ああ、大丈夫」

ベリルはベッドを水平に戻し、奏子の身体を行儀良く寝かせると、シーツを掛け直した。

「それじゃあそろそろ片付けるとするか」

歩きながら頭を左右に軽く振ると、クロウは奏子の胸の辺りを軽く押した。寝息を立てる奏子の痩せた蒼白い頬に、うつすらと赤みが戻る。「こんなものでいいだろう」

頷いたベリルは奏子の顔を覗きこんだ。「おやすみ、奏子。いい夢を」

二人の門番は、軽く視線を交わすと、奏子の眠る部屋からその姿を消した。

秋日

放課後の図書室で一人、奏子は返却された本の整理をしていた。

この日、貸し出しと返却の管理を担当する図書委員は一年先輩の生徒の筈だったが、体育祭の準備に駆り出されたため、奏子が交代で入っていた。校庭からは応援合戦の練習の大きな声と音楽が鳴り響いている。

中間テストも終わり、体育祭一色に染まる校内は活気に溢れていた。体育祭の日が近づくにつれ、生徒たちばかりではなく教師たちもどこか浮足立っているように見える。だが奏子は、そんな学校の雰囲気も何処か余所事よすうじのように感じ、興味が持てずにいた。

一通り作業を終えると、一冊の大きな本を手に窓の傍の椅子に腰を下ろした。天使と悪魔をテーマにした西洋の画集で、その中には愛らしい赤ん坊姿の天使から、不気味な姿で人間の命を奪う悪魔の姿まで、様々な絵が描かれている。宗教に興味がある訳ではないが、奏子はこの画集が気に入っていた。

その中の一枚の油絵。二人の美しい白人の青年が背中合わせになり、冷めた目でこちらをまっすぐ見つめている。一人は金髪に緑色の瞳で、襟元に羽飾りがあしらわれた純白のローブを羽織っている。もう一人は黒髪で、銀糸で刺繍を施された黒いマント姿。二人の指先は軽く触れあっている。作家名は不詳だが、百年以上前に描かれた「生と死の門番」というタイトルのつけられたその絵に、奏子はすっかり心を奪われていた。

「三沢さん」

振り向くと、奏子と同じクラスの高木美帆子たかぎみほこが文庫本片手に立っていた。「随分熱心に読んでいるのね」

「ごめんね、気がつかなくて」

慌てて立ち上がるうとする奏子に、美帆子は軽く手を振った。「いいの。今日は本を借りに来たわけじゃないから座ってて。それよ

り、これ何の本？ 初めて見たわ」

美帆子は画集を指差した。

「天使と悪魔をテーマにした画集なの」

画集を美帆子が見やすいように動かす。「特にこの絵が気に入っているの。ほら、素敵でしょ」

「へえ。確かに綺麗な絵ね」

美帆子は奏子の隣に座った。美帆子は入学式で新入生代表に選ばれたほど成績優秀ながら、背がすらりと高く、知的で華やかな顔立ちの持ち主だった。

奏子と美帆子はお互い友人と呼べるほど親しいわけでは無かったが、大好きな美帆子は頻繁に図書室に出入りしているので、図書委員の奏子と話す機会が多い。

「タイトルが生と死の門番？ どういう意味かしら」

美帆子は首を傾げた。「白い服と黒い服なんだからこの二人は天使と悪魔、って事よね」

「けどどっちも悪魔には見えないでしょ」

頬杖をついた美帆子はうーん、と声を上げた。「でも天使にも見えないわ。この二人、なんだか冷たそうだし、人間なんて興味無い、って表情だもの。三沢さんもそう思わない？」

「確かにそうね」奏子は頷いた。「以前読んだ本に、神様や天使たちは本当は人間のことを守護している訳じゃない、ただ観察しているだけだ、って書いてあったの。逆に悪魔は人間の弱い心と愚かな行動を眺めて楽しんでるだけで、人間の魂を奪ったりしないんだって。この絵を見ると、天使と悪魔はまさしくそんな存在なのかな、って思えるのよね」

「成程ね。まあ所詮、天使も悪魔も人間の想像の産物でしかないけど」

軽く肩をすくめると、美帆子は本のページをパラパラとめくった。二人は暫く他愛のない話をしていたが、美帆子はふと思い出した様に奏子の顔を見た。

「そう言えば、三沢さんはスウェーデンリレーの女子アンカーだったわよね」

「え？ そうだけど、それがどうかしたの」

唐突な質問に少し驚いた。

「三沢さんって完全に文学少女だと思っていただけ、凄く足が速いのよね。体育の時見てびっくりしちゃった」

奏子は照れたように両手で頬を覆った。「確かに走るの好きだけど、長距離は苦手だし、球技は下手だし、運動神経がいいって訳じゃないから」

体育祭の個人出場種目は、大抵体育の成績で振り分けられる。公平さを保つために、陸上部に所属する生徒はリレーや障害物競走などの陸上競技に出場出来ない決まりがあるため、文化部の奏子が女子アンカーに選ばれた。

男女混合スウェーデンリレーは、男女十人が交代で五十メートルずつ距離を増やしながら走り、奏子は女子の中では最も長い四百五十メートルを走ることになっている。

「でも、いいチャンスだと思わない？」

美帆子の言葉に、奏子は「何が？」と首を傾げた。

「だって三沢さん、何時も大人しいし、どちらかといえば引っこ込み思案でしょ。スウェーデンリレーは体育祭の花形競技だし、活躍出来れば注目を浴びてみんなと話す機会ももっと増えるわよ」

「私は別にそんな……」

困惑気味の奏子の肩を美帆子は軽く叩いた。「駄目よ、そんなことばかり言ってちゃ。もっと積極的にならないと。みんな三沢さんが大人しすぎて何となく近寄りがたいと思っているだけなんだから待っているだけじゃ何時まで経っても友達なんて出来ないわよ」

クラスメイトを気遣って出た言葉とは解っていたが、奏子は周りにそんな風に思われているのか、と少し寂しくなった。

「それに、私から見れば三沢さんが羨ましいくらいよ」

「羨ましい？」

「だって、三沢さんが女子アンカーならバトンを渡すのは小塚君でしょ」

椅子を後ろに傾けながら、美帆子は悪戯っぽく微笑んだ。「ちょっと良いと思わない？ 小塚君」

奏子は「まあ……」と曖昧に頷いた。四百メートル走者の小塚俊介も同じクラスの男子生徒だが、今まで直接話をしたこともなく、美帆子の言うような特別な感情は持っていなかった。

「小塚君はみんなから人気があるみたいだけど、あまり話してないから良く解らないの」

「ふうん。そんなものかな」

つまらなそうに暫く視線を天井に彷徨わせた美帆子は、「もうこんな時間」と立ち上がった。「興味が無いならそれでいいの。ごめんね、変なこと言つて」

「ううん」奏子は首を振った。「私こそ、話に付き合わせてごめんなさい」

美帆子にはにっこりと微笑んだ。「委員の仕事頑張つてね」

「ありがとう」

再び、図書室は奏子一人だけとなった。

それから十日後の体育祭当日は秋晴れに恵まれた。

学年対抗の競技プログラムは順調に進み、既に奏子は障害物競走を出場者三十人中四位でゴールしていた。午前中は個人競技が多く、昼食を挟んで午後からは応援合戦、女子生徒の綱引き、名物種目となっている男子生徒による騎馬戦、そして最後に最も配点の大きいスウェーデンリレーが始まる。

当然の様に三年生が最も点数を稼いでいたが、二年生と一年生は今のところ接戦だった。

トラックの中央では、派手なパフォーマンスを競い合う応援合戦が始まった。大音響が響き渡り、一年生の応援団男女合わせて五十人が配置に着く。他の生徒達はトラックの外周にクラス別に固まっ

ていた。

「問題は団体戦だな」

「団体戦は上級生の方が絶対有利だろうしな。大体学年対抗で騎馬戦なんて、先輩連中に反則してくれ、って言っているようなものじゃないか」

「ある程度はしょうがないとしても、怪我しなくて済む程度にしてくれればいいけどなあ」

直接グラウンドの上に腰を下ろしている一年生の生徒達が囁き合っていた。

最後のスウェーデンリレーに参加する生徒と補欠メンバーは、騎馬戦、綱引きには出場しない。小塚俊介は奏子の二つ隣の場所で同級生の応援合戦の様子を見守っていた。

この数日、何度かリレーのバトンパスの練習を一緒に行ったが、俊介のパスを受け取る時も、奏子がアンカーにバトンを渡す時も一度もミスが起きなかったこともあって、奏子がリレーのメンバーと話す機会は殆ど無いままだった。放課後の一、二時間の練習時間を奏子はただ黙々と走ることに費やした。

そんな奏子とは対照的に、俊介は常に誰かに囲まれて、人懐こい笑顔を見せていた。

だが、その笑顔が奏子に向けられることはなかった。ただ気真面目に、「一、二の三。このタイミングでバトンを渡すから」と言われ、「じゃあ、このタイミングで手を伸ばすね」と何度か確認し合っただけだった。

最前列では美帆子が他の生徒と肩を並べ、音楽のリズムに合わせて手を叩いている。体育座をする膝の上で、奏子も周りに合わせ小さく手を鳴らす。流れている曲に聞き覚えはあるが、歌手名が思い出せない。

同級生の女子生徒たちが家庭課室で仕立てていた、裾の長いコバルトブルーの衣装とオーガンジーの白いスカーフが、曲に合わせ青い空に溶けるように舞う。

早く終わらないかな。奏子は雲を見上げた。

盛大な拍手の中、一年生のパフォーマンズが終わり、二年生、三年生と続く。応援合戦が終了する頃には、大音響に耳の奥が少し痛んだ。

「次のプログラムはー、女子による綱引きです。綱引きに出場する女子はー、中央テントの下にー、集合してくださいー」

間延びした甲高い声のアナウンスが響く。「続きましてー、騎馬戦に出場する男子はー、第二テントの下にー、集合してくださいー」
オーエス、の掛け声とともに綱引きが始まった。皆立ち上がり声をあげて応援する。体格差が殆ど無いたためか、一年生は三年生に負けたものの、二年生には勝った。そして二年生が三年生に勝ったので、綱引きによる得点差は付かないままになった。

そして騎馬戦。出場者全員が騎馬を組み、トラックを一周する。一年生代表の騎馬が生徒達の前まで来ると、それまであまり声を出していなかった俊介が片手を口に添え、右手を大きく振って声を張り上げた。

「テツ、頑張れよ！ 落ちるんじゃないぞー」

その声に、騎馬の上に乗る徹司はガッツポーズをして見せた。陽に焼けた顔から白い歯が光る。「任せとけ！」

女子生徒からも「篠原くーん！ 頑張つてねー！」と黄色い声が上がった。にこやかに手を振りかえす徹司。高校一年生で既に百八十センチメートルを超える長身の徹司は、校内でも目立つ存在だった。

学年ごとに二十組の騎馬が横一列に並び、丁度三角形を描くように向かい合った。

教師がピストルを上に向ける。

「位置について。よい、スタート！」

発砲音とともに、一斉に騎馬が相手に向かって走り出した。

「どけえ、ガキども！」「さっさと渡さないと殴り倒すぞ！」「うるせえ！ 先輩面してんじゃねえよ！」「なめんじゃねえぞ！」

男子生徒たちの怒号が乱れ飛ぶ。上級生にジャージを引っ張られたり、髪を掴まれた下級生の鉢巻きがどんどん奪われていく。なかには体当たりで相手の騎馬を崩す生徒もいた。そんな中、徹司の乗る騎馬は揉み合う騎馬の間を器用にすり抜け、相手の後ろに回り込むと、長身と長い腕を生かして次々に鉢巻きを奪い取っていく。その姿は自信に満ち溢れ、騎馬役の三人の生徒たちも余裕綽綽といった表情を見せていた。

「いいぞー、徹司。その調子だ！」

俊介は徹司の奮闘ぶりに一層声を大きくした。

「いけー！ 二、三年生に負けるなよー！」

「反則ばつかしてんじゃねえよ！ 先輩としてのプライドが無いのか！」

「篠原！ 加藤！ 頑張れ！」

「佐々木組、しっかりしろ！ 後ろに気をつけろ！」

生徒たちはみな声を上げ、必死で応援している。目の前で繰り広げられる迫力ある光景を、奏子は固唾を吞んで見守っていた。

騎馬を組む男子生徒たちが次々とグラウンドの上に崩れ落ちていく。集中攻撃を受け引つかき傷が出来た生徒や、相手と半ば乱闘状態になり鼻血を流している生徒も数人いた。

「そこまで！ 終了！」

再び発砲音が響き渡った。「鉢巻きを巻いていない騎馬はみんなその場に座りなさい！」

勝ち残った騎馬は十騎ほどだった。一年生の赤い鉢巻きを着けた騎馬は二騎。その中には一年生の応援席に向かって大きく手を振る徹司の姿もあった。その手には上級生から奪い取った緑と青の鉢巻きの束がしっかりと握られている。

「良くやったぞー！ 加藤、篠原！」

「よっ。一年の星！」

一年生は勝ち残った同級生八人に大きな声援と拍手を送った。競技の勝敗は奪った鉢巻きの数で決まる。残った騎馬こそ少な

ったものの、徹司たちの活躍で、一年生は三年生と並んで一位になった。次のスウェーデンリレーの結果次第では、歴代初の一年生の優勝が可能な点差だった。

「やったな！ 小塚、三沢。リレーは絶対に優勝しろよ！」

近くにいた男子生徒が、俊介の肩を抱きながら奏子にピースサインをして見せた。その仕草に驚く間もなく、周りの生徒たちは次々に二人に話しかけた。

「初の一年の優勝はお前たちの足に懸っているからな」

「絶対に優勝しようぜ！」

「おい、小塚。篠原の健闘を無駄にすんじゃないぞ」

俊介は苦笑しながら鼻の下を指で擦った。「任せとけて。徹司にだけいい思いをさせてたまるかよ」

「その意気だ！ バスケ部の意地を見せろよ！」

同じバスケットボール部の男子生徒が俊介の頭を力任せに撫で回した。少し伸びた前髪がクシャクシャになる。

「何だよ、それは」俊介は唇を曲げ、髪を手櫛で直した。「バスケットは関係ないじゃないか」

「三沢さん、頑張ってるね。みんな応援しているから」

ポン、と背中を叩かれ、奏子は後ろを振り向いた。そこには笑みを浮かべる美帆子と、数人の女子生徒が期待を込めた目で立っていた。

「三年生がビリで一年生が一位なら逆転優勝よ。期待してるからね」周りの態度に戸惑いながらも、奏子は「分かってる」と力強く頷いた。

初恋

スウェーデンリレーのスタートを告げる発砲音と同時に、大きな歓声が沸き起こった。

第一走者の五十メートルを皮切りに、百メートル、百五十メートルと距離を伸ばしながら、バトンが次の走者に渡っていく。奏子と俊介はトラックの中のスタートラインに近い場所で、軽く足を上下に動かしながらその様子を見守っていた。走者間の距離はまだ開いていない。

大丈夫、練習の時の様にただラインに沿って走ればいい。黙々とウォーミングアップをする奏子は、何処か遠くで声援が響いているように感じていた。

男子生徒が三百メートルを走りきった時、一年生の順位は二位。バトンが女子走者に渡る。一位を走る三年生に十五メートルほどの差が付いているが、奏子の目の前を走るトップの走者はそれほど俊足ではない。これなら何とかなるだろう。奏子は呼吸を整えた。

次の走者である俊介にバトンが渡る時だった。トラックに赤いバトンが転がった。

歓喜とともに悲鳴に似た声上がる。

バトンパスの失敗。慌てて女子生徒はバトンを拾い、俊介に渡すが、あつという間に二年生に抜かされ、距離を大きく開けられた。バトンを落とした女子生徒はどよめきの中、その場に座り込み、頭を両腕で覆っている。

だが俊介は全く諦める様子を見せず、両手を大きく振りながら奏子の目の前を走り去って行った。そして二百メートルを超えたところで、疲れの出始めた二番手の走者との一氣に距離を詰めていく。

「まだ行ける！ 諦めるな！」

俄然、一年生のテンションが上がった。

「振り切れー！ 一年には負けるなあ！」

「小塚！ 走れー！ 小塚あ！」

一年生と二年生の歓声がより大きくなった。

何も考えずにただ走るんだ。それだけでいい。奏子はスタートラインに立つと呼吸を整えた。

隣のコースで三年生にバトンが渡る。四百メートルトラックを回って来た俊介の姿が近づく。二年生にバトンが渡る。俊介のバトンを持つ手がすぐ後ろにあった。

「三沢、頼む！」

バトンを受け取った。グラウンドに響き渡る声、実況中継をするアナウンスの喧騒。奏子には何も聞こえなかった。耳に届くのは自分の息使いだけ。

流れていく景色とともに目の前に迫る走者。トラックを半分走ったところで横に並んだ。

「頑張れー！ 三沢！」 「もうすぐだ！」

前走者を追い抜いた。数十メートル前に一位の女子生徒の背中が見える。三百メートル。三百五十メートル。ひたすら全速力で走り続ける。そしてついに十数メートル先に先頭走者の姿を捉えた。

「みつ、さつ、わっ！ みつ、さつ、わっ！」 手拍子が鳴る。

あと少し。もう少し。バトンを持つ手に汗が滲んだ。

「お願い！」

バトンがアンカーに渡った。

奏子は息を弾ませたまま、グラウンドに倒れ込んだ。拍手が響くが身体を起こせない。仰向けになったまま顔を横に向けると、少し離れた場所で、俊介とバトンを落とした女子生徒が、アンカーの少年に向かって声援を送っていた。

アンカーの男子生徒はペース配分を崩さぬよう、先頭走者と同じ距離を保ちながらトラックを回る。二百メートル。三百メートル。徐々にペースを上げて行く。そして奏子の目の前を通り過ぎる時、ついに先頭の二人が並んだ。

「もう少しよ！」 上半身を起こした奏子は初めて大きな声を出した。

「頑張つて！」

ゴールまであと数十メートル。トラックには地鳴りの様な声が響き渡っている。

二人の男子生徒はほぼ同時にゴールのテープを切った。

ピー、とゴールを告げる笛が鳴る。

「一着は一年生代表！ スウェーデンリレーの優勝は一年生です！」
アナウンスが流れると、一年生は大歓声を上げながら一斉にトラック内に駆け寄ってきた。奏子の周りにも人だかりが出来る。

「凄いわ、三沢さん！ 見直しちゃった」「三沢、本当に速かったよ」「リレーのMVPは間違いなく三沢さんだよ」

「あ、ありがとう、みんな」

「何言ってるのよ。今日のヒロインは間違いなく三沢さんじゃない」
美帆子が手を伸ばす。その手を取ると奏子は立ち上がった。奏子を取り囲む生徒の顔は興奮と歓喜で一様に綻んでいる。

「ありがとう、三沢さん。挽回してくれて」

バトンを落とした女子生徒が右手を差し出した。その目は少し腫れている。奏子は遠慮がちにその手を握り返した。

「その、あまり気にしないで。距離を詰めてくれたのは私じゃないし」

奏子の目線の先には、こちらに向かって歩いて来る俊介とアンカ
ーの男子生徒の姿があった。

「三沢、凄い追い上げたな」

全身に汗を浮かべたままの俊介が声を掛けた。「助かったよ」

「小塚君だつて諦めずに走ってたじゃない」

女子生徒の一人が俊介をねぎらった。「それでみんな諦めずに最後まで応援出来たのよ」

「でも三沢さんがあそこまで距離を詰めてくれなきゃ、一位は絶対なかったよ」

アンカーの生徒はまだ肩で息をしていた。「なあ、小塚？」

「そんなことは……」

「そんなことあるよ。今日の勝利は、間違いなく三沢のお陰だよ」
俊介の口元から白い歯が覗いた。「よくやったな、三沢」

奏子に向けられた人懐こい微笑み。日焼けした鼻の先は、小さな子供の様に少し皮が捲れている。

「うん……。私も、ありがとう」

男子生徒が声を上げた。「何言ってるんだよ。礼を言うのは俺たちだよ！ 本日の主役達、ありがとう！」

三人に賛辞の言葉とともに盛大な拍手が送られた。

「よせてば。オーバーだなあ」

俊介は照れたように笑うと奏子の背中を軽く叩いた。「参っちゃうよな」

一瞬、心臓が止まったように感じた。そしてかつてない速さで鼓動が高鳴っていく。今まで経験したことのない感情が全身に溢れ出していた。

どうしたのだろう。奏子は自分自身に戸惑った。まともに俊介を見る事が出来ない。

「三沢、どうかしたのか」

俊介は奏子の顔を覗きこんだ。「気分が悪いのか」

「うつん。自分でもびっくりしちゃって」

俊介の声だけが、奏子の脳裏に繰り返し響き渡る。「ごめんなさい。……でも、一位になれて良かった。ほんとに良かった」涙が頬を伝う。

「あー。三沢さんたら、感動して泣いちゃってる！」

「確かにこれぞ青春、って絵面じゃない？」

同級生たちの言葉に奏子は何度も頷き、指先で涙を拭った。

「ねえ、写真撮ろうよ！」

そう言った女子生徒の手にはカメラがあつた。

「よし、みんな並べ。我らがヒーロー三人が中心だぞ！」

俊介とアンカーの男子生徒が肩を組み、奏子はその傍に立った。それを取り囲むように生徒たちが並ぶ。

「ほら三沢さん、笑って！」

奏子是不器用に微笑んだ。

「ハイ、ピース！」シャッター音が聞こえた。「もう一枚行くよー」全校生徒の集合を呼びかけるアナウンスが流れる。

夕刻を告げる秋の風が、奏子の肩にかかる髪をゆっくり揺らした。

二月に入り、登校する三年生の姿も疎らになっていた。

白く曇った窓ガラスを指でなぞる。今年二度目の積雪で、グラウンドのあちこちに、掻き集められた雪の山が出来ていた。

昼休憩の教室の中、奏子は窓際の自分の席に座ったまま、ぼんやりと窓の外の白い景色を眺めていた。昼食を取ったばかりで、暖房も効いているせいか、眠気がする。次の授業が始まるまであと二十分ある。少し眠ろう、と机の上に突っ伏した時だった。

「三沢さんはどうするの？」

顔を上げると、前の席の西田ユリが椅子に座ったまま、奏子の方に身体を向けていた。三つ編みに結わえた長い髪が椅子と机の間に挟まっている。その隣の席ではもう一人の女子生徒が、興味津々といった顔で奏子を見つめていた。

「え？」意味が解らなかった。「何をどうするの？」

「だから、バレンタインデーの話よ。三沢さんは平岡君にチョコレートをあげるんでしょ」

平岡とはスウェーデンリレーでアンカーを務めた男子生徒の事だった。体育祭の活躍の後、元々人気のあった俊介や徹司に加え、平岡将人もよく生徒たちの話題に乗るようになっていた。

そして奏子自身も、体育祭以来何かと話しかけられる機会が増え、同級生との距離が近くなったと感じていた。

「どうして私が平岡君に……」

ユリの言葉に奏子は当惑した。将人とはクラスが違ったこともあって、今でも挨拶程度の会話しか交わしたことがない。

椅子を近づけた尚美が、ユリの脇腹を肘でつつく。「馬鹿ね、ユ

り。三沢さんは小塚君に決まってるじゃない。ねえ？」

そう言って奏子の顔を覗きこんだ。

ユリは意外そうに「そうなの？」と首を傾げた。「平岡君の方が三沢さんとお似合いだと思っただけだ」

「ね、待ってよ」

尚美は構わず続ける。「だって、小塚君の方が優しそうじゃない。三沢さんもそう思うでしょ」

「えー。確かにそうかもしれないけど、平岡君の方が絶対カッコいいじゃない」

「よく言っわよ。ユリだって体育祭までは平岡君の名前も知らなかったくせに」

「ねえ」焦ったように奏子は二人の間に手を伸ばした。「ちよつと待ってよ、二人とも。私は誰にもチヨコレートをあげるつもりなんてない、ってば」

きよろきよろと周りを見回した。教室の中に俊介の姿は無い。他の生徒たちは数人集まって談笑していたり、昼寝をしていたりと、特に誰かが奏子たちの話に聞き耳を立てている様子はなかった。

「え、じゃあ、三沢さんは誰が好きなの？」

ユリは身体を机に乗り出すようにして尋ねた。「もしかして、篠原君？ それとも加藤君？」

「どうして体育祭の有名人ばかりなのよ」

尚美は呆れ顔でユリのお下げ髪を引っ張った。「他にも男子はいくらでもいるじゃない」

「ちよつと、痛いわよ」

ユリは眉をしかめた。「そんなこと言っただって、三沢さんが好きそうな人、他に思いつかないんだもん」

「だからちよつと待ってよ、二人とも！」

思わず大きな声を上げた。そしてはっ、と両手で口を塞ぐ。

「どうしたの？」ユリは首を傾げた。

奏子は一つ息をついて声のトーンを落とした。「平岡君も小塚君

もそんなの関係ないわよ。それより、どうして私に好きな人がいる、って前提なの？」

ユリと尚美はきょとん、とした。

「だって、体育祭以来、三沢さん可愛くなっただじゃない」

二人は顔を見合わせ「うん、うん」と頷き合う。

「恋する乙女よね」

「こっ……」奏子は啞然とした。

「——ねえ、三沢さん。昨日の世界史のレジユメ、持っていたら貸してくれない？」

後ろの席から美帆子の声が聞こえた。振り向いた美帆子の机の上には、次の授業の準備が既に整っている。

「えっ、ええ……」

助かった。そう思いながら奏子は鞆の中からクリアファイルを取り出した。「ああ、あった。これの事よね」

明日まで使う理由のない、世界史の資料がコピーされたB5サイズ一枚の紙。奏子は身体をよじらせ美帆子に手渡した。「はい」

丁度その時、予鈴が鳴り響いた。

「あー。五時限目の宿題忘れてたあ！」

尚美はそう言って小さく手を叩くと、自分の椅子を慌てて元の位置に戻した。「やばいなあ。どうしよう……」

「ありがとう。助かったわ」

レジユメを受け取った美帆子は意味ありげな笑みを浮かべている。奏子は複雑な面持ちで「どういたしまして」と呟いた。

「助け船を出してくれたのね」

放課後の図書室は相変わらず閑散としている。奏子と美帆子は、足下を暖める為の小さな電気ストーブの前に椅子を並べて座っていた。

「別にそんなつもりじゃなかったんだけど」

美帆子の言葉に奏子は首を振った。「それでも助かったわ。あり

がとう」

「別にお礼を言われるようなことはしていないわ」

美帆子は上着の胸ポケットからハンカチを取り出すと、眼鏡を丁寧に拭き始めた。「まあ、ああいう話って、三沢さんは得意じゃないでしょうけど」

筋の通った鼻。切れ長の大きな瞳。白い肌にふつくらとした赤い唇。才色兼備。正しく美帆子の為にある言葉ではないか。奏子はそう思い顔を伏せた。

「それより、私、前にも言ったと思うけど、小塚君の事が好きなの。あまりにもさりげなく発せられた言葉が、細い矢のように奏子の心に突き刺さる。

眼鏡を掛け直した美帆子は奏子の方をちらりと見た。伸びた髪が奏子の横顔を隠している。

「それでね、今度のバレンタインデーに、思い切って告白しようかな、と思っているの」

「そう……」俯いたままそう答えるのが精一杯だった。

「構わないのね？」

「私がどうこう言う筋合いなんてないもの」

「じゃあ聞くけど、三沢さんは、小塚君のことどう思っているの？」

奏子は言葉を選ぶようにゆっくりと答えた。「小塚君のことは、嫌いじゃないわ。スポーツは万能だし、優しそうだし、いい人そうだし……。高木さんが好きになっても不思議じゃないと思う」

「本当にそれだけ？」美帆子は額に皺を寄せた。「違うんでしょ？」そう言って奏子の顔を覗きこんだ。

恐らく何もかも解った上で訊いているのだろう。奏子は唇を噛んだ。「ただのクラスメイトよ。それだけじゃいけないの？」

美帆子は奏子の様子など気にすることなく続ける。「私だって正直に言っただから、三沢さんももう少し素直になってくれてもいいんじゃないの？」

「……どういう意味？」

「誰かのことを好きになるという事は、恥ずかしいことでも、隠しだてするようなことでもなんでもないと思うの。第一、自分の感情を押し殺しても、誰も褒めてくれやしないし、三沢さんも苦しいだけでしょう。いつまでもそうやって自分の殻に閉じ籠っていても仕方ないと思うんだけど」

「別にそんなつもりはないわ」

その声は僅かに震えていた。膝の上で握り締めた拳に汗が滲む。

「そうかしら？ でも満更的外れな意見でもないと思うのよね」

「高木さんのいう事だけが正しい、ってわけじゃないじゃない」

「でも、三沢さんは小塚君の事が好きだ、っていうのは正しいでしょう」

「いい加減にして！」

堪らず立ち上がった。「私が誰を好きでも、みんなが誰を好きでも、そんなこと高木さんには関係ないじゃない。もう、放って置いてよ！」

椅子が音を立てて倒れた。はっ、として美帆子の顔を見下ろす。

美帆子は少し困った様に首を傾げていた。

「……ごめんなさい」消え入りそうな声で言うと奏子は目を伏せた。美帆子は首を横に振った。「ううん。悪いのは私だわ」一つ息を吐き、奏子を見つめた。「実は私、小塚君に好きな人がいる、って知っているの」

「えっ……」奏子の身体が凍りつく。

美帆子は倒れた椅子を元に戻すと、奏子に席に着くよう促した。

「少し、話を聞いてくれない？」

小塚君に好きな人がいる――。

奏子は膝を折るように椅子の背凭れに寄り掛かった。

「彼に好きな人がいるって知っていても、その子と相思相愛にならない限り、いえ、もしかしたら相手は小塚君のことを好きじゃないかもしれないじゃない。そうなれば私にも当然チャンスはある、ってことでしょう。それならいっそ告白した方がいいと思ったの。例

え振られちゃっても、その方がすつきりするし、後悔しなくて済むはずだから」

体育祭の時に初めて抱いた俊介への淡い想いを、奏子は自覚していた。無意識のうちに視線は俊介の姿を追い、どんなざわめきの中でも俊介の声を聞き取るうとする。俊介のことを考えるだけで胸が高鳴り、他の女子生徒と話をしている姿を見かけると、ざらついた砂を噛むような思いに苛まされる。

そう、きつとこれが「恋」。

奏子の世界は全て変わっていた。通学路の景色。校舎の匂い。グラウンドを吹き抜ける風の音。何もかもが眩いほどに輝いている。

だが奏子にその想いを告白する勇氣は無かった。俊介にとって、奏子はただのクラスメイトの一人に過ぎず、人気者の俊介が、地味で引つ込み思案の自分に特別な興味を持つ筈がない、そう思っていた。ただ毎日俊介の姿を見る事が出来ればそれだけで良かった。

「……でも、小塚君が好きな人が、やっぱり小塚君の事を好きだったらどうするの」

椅子に座り直すと、奏子は呟いた。

「そうねえ」美帆子は背を大きく後ろに反らせると、天井を見上げた。「その時はすっぱり諦めるわよ。彼女のいる男の子に横恋慕なんて、それこそ青春の無駄使いだもの。それにカッコ良くて優しい男の子なんて幾らでもいるわ」

そう言い切った美帆子の横顔には僅かに笑顔が浮かんでいる。それが自信から来るものなのか、自嘲なのか、奏子には判りかねた。

「高木さんは、小塚君が好きな女の子のこと知ってるの?」

「勿論よ。誰の事が知りたい?」

俊介に想い人がいるという事実だけで十分だった。ゆっくりと首を振る。「ううん。私には関係ないから」

はあ、と美帆子は溜息をついた。「小塚君が他の女の子と恋人同士になっても平気なの?」

「じゃあ、どう答えればいいの?」

床に視線を落とし、脚を真直ぐに投げ出した。上靴の爪先で、ストーブを軽くつつく。「平気だと言っても、高木さんはどうせ嘘だ、って言うんでしょ」

「そうね。そうかもしれない。ごめんなさい」

ぼつり、と美帆子は言った。「こんなことを言うために図書室へ来たんじゃないんだけど」

「……うん」

時折埃を焦がして音を立てる電気ストーブの光が、二人の少女の頬を赤く照らしていた。

雪花

朝になり、降り続いた雪は雨へと変わっていた。道路の端には黒く汚れた雪の塊が残っている。傘を差す指先は、手袋を着けていてもかじかんだ。

「おはよう、三沢さん」ユリが声を掛けた。マフラーをお下げの上から巻いている。

「おはよう。今日も寒いわね」

二人は並んで歩きだした。同じ学校に通う生徒たちの傘の波が駅から続いている。

「あのさ、リレーに出場した女子みんなで小塚君や平岡君たちにチヨコレートをあげる、って本当？」

「ええ。昨日代金を徴収されたわ」奏子は苦笑した。

スウェーデンリレーで百五十メートルを走った井上真紀いのうえ まきの発案で、奏子たち五人が五百円ずつ出し合い、同じくリレーに出た男子生徒五人に連名でチヨコレートを渡す事になった。所謂「義理チヨコ」だが、奏子も他の生徒も反対する者はいなかった。

「いいなあ、みんな」

「何が？」

ユリは赤くなった鼻を軽く吸った。「だって、リレーにかこつけてチヨコをあげられるじゃない」

「ああ……」奏子はユリの気持ち何となく解るような気がした。今回の様なきつかけがない限り、俊介にチヨコレートを渡す機会などまず無かっただろう。

「西田さんは、誰かチヨコを渡したい人がいるの？」

「まあね。本気で好き、っていうより、ただの憧れなんだけど、せつかくのバレンタインだし」

「同級生？」

「うつん。三年の先輩。駄目なら駄目でも、もう卒業しちゃう人だ

からいいかな、って思ってた」

「それじゃあ、別にリレーの女子を羨む理由なんてないじゃない」

ユリは「ううん」と首を振った。「だって、本命は別にいるんだもん」

そう言ってマフラーの中に首を埋めた。

「リレーに出た五人の中に本命の人がいるって事？」

「うん。でも、上手く行かなかった時、彼とギクシャクするの嫌だからさ。どうしようかな、って悩んでるの」

奏子は黙って頷いた。いつか俊介にも恋人が出来るだろう。想像するだけで胸は痛んだが、下手に告白して気まづくなったり、嫌われてしまうより、今のままの方がずっといい。奏子は歩道の上の小石を軽く蹴とばした。

「ねえ、西田さんの好きな人って、もしかして……」

「内緒！」頬と鼻先を真っ赤にして、ユリは微笑んだ。

二月十四日、土曜日。朝から教室の中はいつもとは違う雰囲気包まれていた。女子生徒たちは時折甲高い声を上げながらひそひそと囁き合い、男子生徒たちは平静を装いつつも何処か落ち着かない黒板の前では、既にチヨコレートを貰った少年が、周りの男子生徒に囁し立てられている。

「小塚君、遅いね」

尚美の声に、ユリは腕時計を確認した。予鈴までもう数分もない。

「さては、早速女子に捕まったかな」

「きつとそうよ。土曜日だから朝練はないはずだもん」

「もしかして篠原君と一緒にかな」

「もしかしくなくても、いつも一緒みたいじゃない、あの二人」

その時、俊介が教室の扉を爪先で思い切りよく開けた。おお、と教室の中がどよめく。

「すげえな、小塚。モテモテじゃないか！」

スポーツバッグを背負った俊介の腕の中は、綺麗にラッピングさ

れたチョコレートや、プレゼントと思しき紙袋で一杯だった。

「なっ、なんだよ。みんなして」

同級生の視線が一斉に自分へ注がれていることに戸惑ったのか、俊介は一瞬後退った。

奏子は美帆子の方をちらりと見た。美帆子は平然とした顔で頼杖をついている。

「さすがバスケット部の星は違うなあ」

五、六人の少年たちが、教室のほぼ真ん中の席に着いた俊介を取り囲んだ。

「で、どれが本命？」

男子生徒の一人が机の上に置かれた色とりどりのチョコを指差した。

「やめてくれよ」俊介はややうんざりした様に溜息を吐いた。「女子バスケの部員とかからの義理チョコだよ。それに俺だけじゃなくて、徹司の奴も同じくらい貰っていたんだからな」

「義理でもいいじゃないか。この世には一つも貰えない奴がごまんといえるんだぜ」

そう言った生徒を、もう一人の男子生徒が「そりやお前の事じゃないのかよ」と軽く小突いた。

「それにしたって、朝からこれだけ貰ったら、家に帰るまでには幾つになるんだろうな」

「二、三十個にはなるんじゃないか」

「どんな計算方法なんだよ、それ」

少年の一人が机の上のチョコレートの数を数えた。「今のところ本命臭いチョコが三つと、義理が八個だな」

「本命臭い、ってなんだよ。リボンが付いていてちよっと高そうなだけだろ」

「リボンが付いているから、って高いとは限らないぞ」

「それより、小塚一人じゃこんなに食えないだろ。余ったら俺にくれよ。一番安そうなやつでいいからさ」

「そんなさもしい事を言うなよ。悲しくなるだろ」

友人たちの会話に、俊介は「五月蠅いな」と唇を尖らせたが、その表情は満更でもなさそうだった。

予鈴が鳴り響く。俊介はほっとした様に片手を振った。「ほら、チャイムが鳴ったぞ。さつさと自分の席に着け」

「はいはい。解りましたよ。全く、今日ばかりは小塚が王様だな」生徒たちが各々の席に向かう。俊介はバッグから教科書類を全て取り出すと、乱暴に机の引き出しの中に押し込んだ。何冊かが入りきらず床に落ちる。そしてラッピングが崩れることも気にせず、チヨコレートや紙袋を同じようにバッグに詰め込んだ。

「あの様子じゃ、本当にあの中に本命チヨコはないみたいね」

ユリは椅子を後ろに傾け、背中を少し捻らせた。奏子も上半身を机の上に乗り出す。

「女子バスケット部の人たちから貰ったのなら、小塚君の言うように義理じゃないの?」

「三沢さんもそう思う?」

「よく解らないけど、本気で告白したいのなら、みんなと一緒に渡さないんじゃないかな、と思って」

「やっぱりそうかな。でも、一人で渡すなんて恥ずかしいしなあ」
一対一で本命チヨコを渡すことに抵抗を感じて、照れ隠しにみんなと一緒にチヨコを渡したとしても、その意思是相手にちゃんと伝わらないのではないのだろうか。それに、美帆子ならきつと正々堂々と告白するのだろう。相変わらず凜とした横顔に、奏子はふとそう思った。

午前中で授業が終わり、多くの生徒が下校していく中、奏子たち五人の少女は食堂に向かった。

毎週土曜日は、部活動などで学校に残る生徒の為に、午後から食堂が解放されている。営業はしていないものの、暖房の効いた食堂には五十人ほどが集い、持参した弁当や菓子パンを頬張っていた。

奏子たちは五人の男子生徒のうち既に三人にチョコレートを渡し終え、残る二人は食堂にいる将人と、教室を出て行ったきりの俊介だけとなっていた。

将人は窓際の椅子に座り、同じサッカー部の部員の生徒と二人で缶コーヒートを飲んで談笑している。弁当は食べ終えているようだった。

「平岡君。体育祭の時はお疲れ様。これ、私たちから」

真紀が将人に声を掛けた。ピンク色のラッピングに、金のリボンがかけられたチョコレートを将人に差し出す。

「おお、サンキュー」

特に意外という顔もせず、将人は素直にチョコレートを受け取った。「悪いな、気を遣わせて」

その口ぶりは、五人が連名でチョコレートを渡す事を知っていたようだった。

「何言っているのよ、ねえ」

真紀の言葉に、みな頷く。

「平岡君は押しも押されもせぬ、一年生のヒーローじゃない」

もう一人の少女はややオーバーな身振りで、祈るように両手を胸の前で合わせた。「リレーで優勝したのは平岡君と三沢さんのダブルアンカーのお陰なんだから、もっと堂々とすればいいのよ」

「ヒーローねえ」将人は照れ臭そうに鼻を掻いた。

真紀は将人の隣の椅子に置かれたスポーツバッグを指差した。「もつとも、私達があげなくっても、他の女子から山ほど貰っているみたいだね」

「山ほど、ってなんだよ」

バッグの中から、ジャージとともにラッピングを施されたチョコレートが顔を覗かせている。

「これか」将人は苦笑した。「そりゃいくらかは貰ったけど、みんな井上たちと同じでただの義理チョコだよ。ああ、でもアンカーをやって目立った分だけ、確実に数は増えたかもな」

平岡将人は華のあるタイプではないが、落ち着いた物腰と物怖じしない性格で、同級生の男子生徒たちより大人びて見える。ユリの言うように、将人が俊介や徹司より「カッコいい」のかどうかは解らないが、奏子も将人に対して悪い印象は持っていなかった。

「全く。平岡も加藤も、同じサッカー部だっというのに差をつけてくれるよ」

将人の目の前の席で缶コーヒーを口にする少年は、拗ねたように唇を尖らせた。「俺なんてお袋と姉貴以外、さっぱりなんだぞ」

「まあ、そう言っとな、って。井上たちも義理でくれたんだから。そうだ、お前も来年は騎馬戦かりレーに出ろよ。活躍すれば一躍ヒーローらしいぞ」

「俺、騎馬戦には出ていたんだよ。すぐに倒されたけどね」

少年は苦虫を潰した様な顔で将人を睨みつけた。

「そうだったけ？」素知らぬ顔で将人は真紀の持つ紙袋の中を覗きこんだ。「あとは誰に渡すんだ？」

紙袋の中にはもう一つチョコレートが入っている。

「小塚君よ。他の人たちは部活がないみたいだったから先に渡したの」

「その小塚は何処にいるんだ？俺、ちょっとあいつに用があるんだけど」

真紀は首を振った。「分からないの。教室に鞆はあったし、篠原君から部活がある、って聞いていたから、後で探せばいいと思って」「あいつも落ち着きのない奴だからなあ」

将人は腕を組んだ。「じゃあ、手分けして探すか」

「いいの？」真紀は目を見開いた。

「いいも悪いも、あいつが男子更衣室で昼寝でもしていたらどうするんだよ。それとも部活が始まるまで飯も食わずに待っている気か？」

「それもそうね。じゃあ、お願いしてもいい？」

「オッケー」将人は立ち上がり、バッグを手に取ると、「じゃあ、あ

とでな」と渋い顔のままの少年に向かって軽く敬礼してみせた。

真紀たち三人は教室のある本校舎に戻り、奏子ともう一人の少女、そして将人が部室のある体育館に向かった。

「腹減っただろ」

将人の問いに、加納恵は「かのうめぐみちよつとね」と腹の辺りを撫でた。時計の針は午後一時三十分を差している。

真紀たちと合流する前、恵は「女の子同士だけど可笑しくないわよね」と、はにかみながら奏子に小さな紙袋を手渡した。可愛らしいパッケージの中には、色とりどりのキャンディが詰め込まれていた。恵のバトンパスの失敗を挽回したらしい。

奏子は少しくすぐつたいような気持で「ありがとう」と受け取った。高校生になってから同級生にプレゼントを貰うのはこれが初めてだった。

「それにしても小塚の奴、一体どこに行っただんだ？」

男子更衣室、体育館、バスケット部の部室と探したが、俊介の姿は何処にもなかった。

「教室に戻ったのかしら」

将人は部室の前で顎を擦った。「ひよつとして入れ違ったのかもな」

「私、一度校舎に戻ってみる。三沢さん達はここで待っていてくれる？」

「いいの？」奏子は小首を傾げた。

「うん。どうせ二時頃には部活が始まるでしょ。部室の前で待っていた方が確実だと思うし、小塚君が教室にいなかったら、みんなをこっちと呼んでくるよ」

恵はそう言うのと踵を返した。階段を二段飛ばしで軽快に上っていく。

その姿を見送ると、将人は手の中のバッグを指差した。「ちよつと、サッカー部の部室に寄っていいか？荷物を置いて来たいんだ

けど」

「ええ、勿論」

サッカー部の部室は部室棟の奥手にあるが、廊下は階段から真直ぐに伸びている。恵がすぐに戻って来ても二人を見失うことはないだろう。奏子は将人の後をついて歩いた。

廊下の両側に緑色の扉が等間隔に続く。向かって右手が女子運動部の部室、左手が男子の部室になっており、扉には「女子卓球部部室。男子の覗き厳禁!」「男子バレー部。入部希望者来たれ!」などと書かれた紙が張られ、部室内からは時折大きな笑い声が聞こえてくる。

「部室棟ってこうなっているのね」

普段立ち入ることのない場所を、奏子は物珍しげに眺めた。

「結構、面白いだろ」

部室棟は体育館の一階にある。校舎から体育館に直接繋がる通路は、更衣室や道場のある二階に位置しているため、運動部に所属しない学生がここに入出入りする機会は殆どない。

「廊下がちよつと暗いのが難点だけだな」

扉の一つが開き、半袖と短パンのユニフォーム姿の女子生徒が姿を現した。

「さむーい!」

「何でこんな冷える日に練習試合なのよ!」

バレーボール部の上級生が、声を上げながら奏子の横を早足に通り過ぎて行く。構造上、日当たりの悪い一階には暖房もなく、奏子の足元も冷え切っていた。

「こんなに寒いのに、みんな大変ね」

「まあ、慣れだよ、慣れ。練習が始まれば嫌でも温もるからな。それより、真夏の方が大変だよ。廊下はまだマシだけど、野郎ばかりの部室なんて、クソ暑い上に汗臭くて堪ったもんじゃないからな」

おどけた口調の将人に、奏子はクスクスと笑った。「想像するだけで何だか臭いそうね」

「だろ？ あ、ここだよ」

将人は部室の扉を開けた。「あ……」動きが止まる。

「どうしたの？」奏子は部室の中を覗きこんだ。

教室の半分ほどの広さの薄暗い空間に、ロッカーがずらりと並んでいる。山積みの備品に、折りたたみ式の長テーブル。マンガ雑誌に有名サッカー選手のポスター。

雑然とした部室の中には、二人の生徒の姿があった。

床の上に尻餅をついた格好の男子生徒。扉に背を向け、少年の首に両手を回している制服姿の少女。

「何やってるんだ、お前ら！」

将人は声を荒げた。「ここは学校だ。いちゃつくなら家に帰ってからやれよ！」

少女は恐る恐る振り向いた。その頬は真っ赤に染まっている。そしてショートカットの小柄な少女の後ろには、見慣れた顔があった。

「小塚……？」

奏子は扉の前で立ち尽くした。全身から血の気が引いていく。

「平岡。三沢……さん」

座り込んだまま、俊介は呆然と二人を見上げた。少女は俊介の胸に顔を埋めている。

「出て行け！」将人は俊介の腕を掴むと強引に立ち上がらせた。「お前もだ！」

少女はバランスを崩し、「きゃっ」と声を上げると、床に両手をついた。

「ここはサッカー部の部室だ。お前たちには関係ない場所だろう。」

さあ、早く！」

「ちよっ、平岡！ 誤解だ！」

つんのめりながら俊介は将人の肩を掴んだ。「別に俺は何もしてない！」

「そんな言い訳が通用するか！ 俺はこの目でしっかり見たんだからな！」

「だから誤解だつて！」

「ふざけるな！」将人は俊介の腕を振り払うと、よろけた俊介の腹に蹴りを入れた。ぐつ、と俊介はその場に蹲すくまる。

「俺が何のために——」

将人が腕を振り上げた瞬間、奏子の身体が扉に当たった。その音に二人の少年が振り返る。

「三沢？」

弾かれたように奏子は走り出した。

「三沢っ！」

廊下を抜け、階段を上がる。連絡通路を抜け本校舎に入り、また階段を上る。四階の校舎の奥。奏子は図書室の扉を思い切り開けた。嵌め殺しの硝子の小窓が鋭い音を立てる。

「どうしたの、三沢さん？」

いつもの場所に座っていた美帆子は、驚いたように目を見開くと慌てて立ち上がった。「何かあったの？」

奏子は俯いたまま何も答えない。

美帆子は奏子の元に歩み寄ると、そつと顔を覗きこんだ。「もしかして、小塚君と何かあったの」

「ううん」奏子は下を向いたまま首を振った。「何も」

「何も無い訳ないでしょう。どうしたのよ。教えてよ」

「何も——」奏子は崩れるように座り込んだ。溢れ出る涙が床を濡らしていく。

「三沢さん……」

嗚咽を漏らし、身体を震わせる奏子の背中を、美帆子はただ黙って見つめていた。

「青春とはかくも儚く残酷なもの、か」

金髪の男は体育館の緑色の屋根の上で仰向けに寝転がり、笑みを浮かべた。「思春期つてのは大変だねえ」

「またここに来ていたのか」

ふと傍らに現れた黒髪の男は、半ば呆れ顔で金髪の男を見下ろした。「仕事だぞ」

「分かってる、ってば」

金髪の男は身体を起こした。「またお馬鹿さん達の相手か。全く、人間というのは懲りない生き物だねえ」

「俺に言わせればお前もそうだがな」

「まあ、そう言わないでよ」

黒髪の男は肩を竦めおどける相棒を軽く睨みつけた。「つまらない事ばかり考えるな。ほら、行くぞ」

「はいはい」

二人の男の姿は、僅かに歪んだ空間の中に消えていった。

暗雲

目の前に広がる光景に、少年は呆然と立ち尽くした。

「ここは何処だ……」

太陽のない鉛色の空。地平線の果てまでも続く荒涼とした赤い大地。無機質に転がる岩石。草木一本生えぬ荒れ果てた地には、人の姿どころか蠢く虫の気配すらない。

「誰かいないのか！」

少年の声は不毛の地に虚しく吸い込まれる。時折吹く乾いた風が、音もなく砂を舞いあげていた。

「どうなってるんだよ」

少年は当てもなく歩き出した。だがどれだけ進んでも同じ景色が続くだけで、鉛色の空の色は変わらない。半日は経過しただろうか。それともほんの十分しか経っていないのか。そんな事すら解らない。だが不思議な事に、喉の渇きも身体の疲れも全く感じずにいた。

「お前が添島和洋か」
そえしまかずひろ

突然、背後から自分の名を呼ばれた。

「誰だ！」和洋は振り向きざま、反射的に声を上げた。

そこにいたのは燕尾服姿の若い男だった。すらりとした瘦躯に黒い髪。白い首筋の上には恐ろしく整った顔立ち。「外人……？」

男はつり上がり気味の目で、和洋をじつとねめつけている。

得体の知れぬ場所ですり寄りではない事に安堵したものの、自分の置かれた状況を把握できない和洋は、男の元に駆け寄ると喰ってかかった。「おい、ここは何処なんだ。何故俺とお前はこんなところにいる。他の奴らは何処にいるんだ！」

男は腕を組み、僅かに頬を歪めた。「何処だ何処だ、と五月蠅い奴だな」

「何だと！」カツ、として拳を振り上げようとしたが、先程男に自分の名を呼ばれたことを思い出し、手を止めた。「おい、お前。俺

の事を知っているのか」

「ああ、良く知っていると。お前の名は添島和洋、十六歳。K市のS高校二年生。口の利き方と同じく成績は最低。父親は現在海外に単身赴任中で、専業主婦の母親は年下の男たちと海外旅行三昧。大学生の姉は水商売の男に貢ぐため、親に内緒でホステスのアルバイトをしている。これで間違いないだろう。それとももう少し詳しく話した方がいいのか」

抑揚のない口調と、見た目にそぐわぬ流暢な日本語だった。

「何故お前がそんな事を知っているんだよ」

怪訝そうに和洋は男を睨みつけた。「そうか、分かったぞ。お前が俺をここに連れて来たんだな。親父がお袋か、誰に頼まれたかは知らないが、奴らのつまらない悪戯に付き合うなんてまっぴらだ。さっさと俺を家に帰せ！」

「それは出来ない」

「なんだと！」

和洋の剣幕など気に留めず、男は切り捨てるように言った。「お前は死んだ。二度と家には帰れない」

「馬鹿馬鹿しい」和洋はせせら笑った。「じゃあ何か？　ここは三途の川か地獄の入口だ、とでも言うのかよ」

「当たらずとも遠からず、といったところだな」

「ふざけんじゃねえよ！」

語気を荒め、男に掴みかかろうとした。だが男は一瞬にして和洋の前から姿を消した。

「なっ……」

「無駄だ」

背後から囁く声。背中にじわりと冷たいものが走る。

「何なんだよ、お前……」

ゆっくりと振り返った。男は相変わらず冷淡な目を向けている。

「お前は一体何者なんだよ」

「俺は死の門番だ。お前たちのいうところの死神だな」男は平然と

言った。

「死神……だと？」和洋の顔が大きく歪む。

「ああ、そうだ。ただ、お前たちの考える死神とはかなり異なる存在だな」

「さつきから、なに馬鹿な事を言っているんだ。その服装といい、頭がおかしいとは思えねえな」

「信じられないのなら、自分の姿を良く見てみるがいい」

サテンの黒い手袋を嵌めた長い指先に従い、和洋は自身の足元に目を向けた。履き慣れたスニーカーに、高校の制服。

「いつもの俺の恰好じゃないか。つまらないこと言ってるんじゃない――」

紺色の制服の生地が、みるみるどす黒く変色していく。「なんだ？」白いカッターシャツは赤黒く染まり、ストライプ柄のネクタイには奇妙な斑点が浮かび上がる。そして身体中から滴り落ちる血が、赤く乾いた砂に吸収されていく。

「……なんだよ。どうなってるんだよ」

脚を震わせ、両手で頭を抱えた。「ひっ……」

指先に崩れた頭蓋の感触が伝わる。金色になるまで脱色された髪は血液と脳漿で黒い束となり、掌にはべつとりと血糊が付いていた。「どうなってるんだよ、おい。つまらない悪ふざけはやめろ。こんなのはただのトリックだ」

「トリックではない。現実だ。だが痛みは感じないだろう」

腕を組んだまま、男は顎をしゃくった。「それが今のお前の、本当の姿だ」

「嘘だ」和洋は膝を落とした。生臭い血が顔面を伝う。「これは夢だ。そうだ。夢だ。こんな馬鹿な話なんてあり得るもんか。そうだ、これは夢なんだ！」

和洋は赤い大地に這いつくばり、声を上げて笑った。腹を擦らせ、足をばたつかせる。その度に和洋の身体からはあらゆる体液が溢れ出た。

「見てみる、死神野郎。こんな状態で生きていられる人間がいる訳ないだろう。割れた頭からは脳味噌まではみ出しているんだぜ。自分の脳味噌を見られる奴なんて絶対にいないよな。しかし、なんて傑作な夢なんだ。このリアル感なんて凄くないか？俺にこんな大それた想像力があつたとは知らなかったよ」

「少し黙れ」

男の鋭い声に、和洋の動きが一瞬止まる。

「うるせえよ。こんな気持ち悪い夢を見ているだけでもうんざりなのに、何だって頭のおかしいペテン野郎に指図されなきゃならないんだ」

「夢ではない。お前は二度と夢など見ない。何故なら、お前は既に死んでいるからだ」

和洋は上半身を起こすと、男を睨みつけた。そしてふふん、と鼻で笑う。「お前は既に死んでいる？どっかの漫画みたいなセリフを吐きやがって。ああ、じゃあこの夢はこの間読んだ漫画の影響、ってことか」

飽くまでも悪態をつき続ける和洋に、男は小さく舌打ちした。「だから餓鬼は嫌なんだ」

「へえ、死神のくせに随分人間臭いことを言うんだな」

男は足音一つ立てず和洋の元へ歩み寄った。よく見ると、黒い革靴のソールは地に付いていない。

「空中浮遊か？さすがペテン師といえども死神、つか」

男は答えない。

「おい、お前は俺の夢なんだろ。なんとか言えよ」

ブルーグレイの瞳が光を帯びた。その瞬間、和洋の身体中に痛みというにはあまりにも凄まじい衝撃が走る。

「がはっ！」和洋は声にならない叫び声を上げた。

骨という骨が軋み、不気味な音を立てながら砕けていく。筋肉は激しく痙攣し、皮膚は引き裂かれ、赤い肉と薄黄色の脂肪が露出する。全ての体液が沸騰したかのように熱く内臓を巡り、鼻孔や口腔

といわず、肛門からも激しく嘔き出ていく。

想像を絶する激痛に気を失いそうになるが、見上げる燕尾服の男の冷酷な視線に呼び戻されるように、再び苦痛の渦に巻き込まれていく。

「た、助けてくれ……」

男に手を伸ばそうとするが、その腕はもはや和洋の脳の指揮下にはなかった。

男は両手を腰に当て、ただ和洋の様子を眺めている。その表情には何の感情もない。

「お願い……だ。助けて……」

泡立つ血液で顎を濡らしながら、和洋は懇願した。「こんな夢……は見たく……ない」

「だから夢じゃない、と言っているだろう」

溢れだす涙が血に染まっていく。「分かった……よ」和洋は何度も頷いた。

再び男の目が光る。

「あ……」先程までの苦痛が嘘のように一瞬で消え去った。顔の傍に右腕を引き寄せる。その手には何の異常もなかった。

「……なんだったんだ、今のは」

大地に座り込んだまま、大きく頭を振った。「気が狂うかと思っ
た」

「お前が死んだ時の状態を再現しただけだ」

「俺が死んだ時……」

「そうだ」男は小さく頷いた。

「おい、死神野郎」和洋は男の顔を真直ぐに見上げた。

「何だ」

「今が夢じゃないって言うのなら、俺は本当に死んだってことか
「何度も言わせるな。お前は死んだ。それだけが事実だ」

「そうか……」乾いた砂を握った。指の間からサラサラと流れ落ちる。「なあ、死神。何で俺は死んだんだ。どうしてこんな処にいる。

教えてくれ」

和洋は言葉を選ぶように訊ねた。

「思い出させてやろう」

男の顔にうつすらと笑みが浮かんだ。

家の電話のベルがけたたましい音を立てている。篠原徹司は枕元の時計を覗きこんだ。時刻は午前二時三十五分。

「もう、またなの？」妻は掛け布団の中に顔を埋めた。くぐもった声で、「どうせ添島、って生徒がらみでしょう。本当に懲りない子ね」そう言つて欠伸をした。

「これも仕事だよ」徹司はベッドから下りると、チェストの上の受話器を取った。「もしもし、篠原ですが」

聞き慣れた声が耳元に響く。「夜分に申し訳ありません。K署の鳥井です」

少年課の女性巡査はいつものように事務的な口調だった。

「いえ。こちらこそ」一つ息を吐く。「もしかして――」

言い切らぬうちに鳥井は答えた。「添島和洋の事でご相談があるのですが」

やはりそうか。徹司は頭を掻き毟った。「添島ですか。今度は何をやらかしたんです？」

「恐喝です。駅前のゲームセンターで中学生を脅して二千元を奪い取ったところを、現場を巡回していた所轄の者が取り押さえました」「そうですか。それで添島の両親は……」

「父親は現在フィリピンに赴任中です。母親は旅行中ということで添島君の引き取りを拒否しています」

ああそうですか、と頷く。この数ヶ月、何度同じようなやりとりが交わされたことだろう。

「被害者の両親は、特に怪我もなかったので示談の方向で良いようです。そうなれば当署としても添島君を勾留する理由はありませんので、お手数ですが、身柄の引受けをお願いしたいと思います」

被害者とはいえ、中学生が深夜のゲームセンターに出入りしていたのだ。相手の両親も体面を気にしたのだろう。徹司は何となくそう思った。

「解りました」再び時計を確認する。「三時過ぎにはお伺い出来ると思います」

「そうですか。お手数かけますが宜しくお願いします」

着替えを済ませ、ネクタイを締めると妻に声を掛けた。「悪いけど行つて来る」

布団から顔を出した妻は、諦め顔で「仕方ないわね」と溜息をついた。

車に乗り込むと、深夜の住宅街を走り進んだ。寝不足のせいか街灯がやけに眩しく感じられる。

徹司が母校の教職に就いてから十四年が経つ。昔とは違い生徒数は半減し、一学級は当時の四十人から三十人編成となっている。生徒数が多ければいい、という訳ではないだろうが、体育祭も昔のような迫力は無くなっていた。

篠原家には二人の子供がいるが、子供たちの通う小学校も昨年近隣の学校と統合したばかりだった。

鳥井巡査から身元の引受けを頼まれた添島和洋は、徹司が担任を務める二年A組の生徒の一人だった。髪を脱色し、ピアスをしているが今の学生はみなそうだ。男子生徒は制服をだらしなく着崩し、女子生徒は髪を巻き、化粧まで施している。生徒手帳にはあれこれ細かく服装規定が書かれているが、誰も守りはしないし、それを注意する教師も少ない。だが徹司や他の教員たちも、学生が昔より性質が悪くなったとは思っていない。自分たちが高校生だった頃も、同じようなものだった筈だ。

そう、何年経とうが学生の本質など変わるものではない。生徒一人一人が負う心の傷の深さも。

信号待ちの間にダッシュボードから煙草を取り出した。一本に火を点けると、深々と煙を吸いこむ。学生時代はスポーツに明け暮れ、

体育教師となつた後も煙草に手を出したことは無かつたが、最近になつて煙草の味を覚えた。決して美味しいものではないが、こんな夜にはつい手が伸びてしまう。

十分ほどで目的の警察署に到着すると、徹司は慣れた足取りで四階の少年課に向かった。生活安全課と少年課が入るフロアには、深夜にも拘らず十人ほどの私服警察官が詰めており、その中には見知った顔も何人かいた。

「添島和洋の保護者の篠原ですが、鳥井さんはいらつしやいますか」
出入口脇の席に着いていた鳥井は徹司の姿を認めると、素早く立ち上がった。新米警察官らしく几帳面に頭を下げる。「お手間を取らせて申し訳ありません」

「いえ、こちらこそ。うちの生徒が御迷惑を掛けてすみません」

「私たちはこれが仕事ですから、どうかお氣になさらずに」

「ところで、添島の様子はとうですか」

「普段と変わりません。どうぞ、こちらです」

鳥井に促され、取調室の一つに入った。小さな部屋の中にはテーブルを挟んで椅子が二脚ずつ並べられている。

「添島君。担任の篠原先生が迎えにいらしたわよ」

大股を広げて椅子に座る和洋は、テーブルの上に頬杖をついたまま、ちらりと徹司の顔を見た。そしてまた壁に視線を向ける。

「おい、添島。帰るぞ」

「何でここに篠原が出てくるんだよ。関係ないじゃねえか」

不貞腐れた声だった。シルバーのアクセサリーに柄シャツ、腰穿きのジーンズ姿。いかにも今時の若者といった身形だが、顔立ちは同級生たちに比べて少し幼い。

「なんだ、家に戻りたくないのか。せつかく鳥井さんが帰っていいって言ってくれているのに」

徹司は和洋の正面の席に腰を下ろした。鳥井は背筋を伸ばしたまま扉の横に立っている。

「別にあんな家になんて帰りたくねえよ」

「そうか。じゃあ、前みたいに先生の家に来るか？ 夜食ぐらい出してやるぞ」

「余計な御世話だ」

苛立っているのか、大振りの指輪を嵌めた指先でテーブルの上をコツコツと叩く。

和洋がこうして警察に補導された事は一度や二度ではなかった。

停学処分も重なり、今度警察の世話になるような事があれば退学も有り得る、ということは学校側から本人にも伝えられている。

「そうは言っても、何時までもここに居る訳にはいかないだろう。取りあえず、一回ここを出よう」

チツ、と舌打ちをすると、「分かったよ」とのろのろと立ち上がった。

鳥井は女性にしてはかなり長身で、小柄な和洋は鳥井と徹司に挟まれるようにして取調室を出た。

「じゃあ、私たちは外でお待ちしていますから、あとはお願いします」

鳥井から受け取った書類にサインをしていると、既に顔馴染みとなってしまった警察官が声を掛けて来た。

「先生稼業も大変ですな」

生活安全課の飛田だった。柔和な目元には深い皺が刻まれている。五十歳は超えているだろうが、厚い胸板と腕の筋肉の逞しさは年齢を感じさせない。

「仕方ないですよ。刑事さん達と同じで、これも仕事ですから」

「いやいや。そんな事はありません」

飛田は首を振る。「今時の若い先生といたら、みんな事なかれ主義の青瓢箪ばかりですからな。それに比べれば、篠原さんは大したものですよ」

「青瓢箪、ですか」徹司は思わず苦笑した。「僕だって図体が大きいだけの小心者なんですけどね」

「我々も似たようなもんですよ」

そう言つて飛田は白い歯を見せた。

軽く会釈をして少年課のフロアを出ると、鳥井の傍で和洋が所在無げに肩を揺らしていた。

「お世話になりました」

徹司は和洋の頭を掴むと、無理矢理頭を下げさせた。「ほら、添島もちゃんと鳥井さんに礼を言え」

「いてえな。放せよ」

頭を振つて嫌がるが、徹司の力には敵わない。徹司の脇腹の辺りで独楽こまのように身を擦らせる姿に、鳥井は初めて笑顔を見せた。

「いいのよ、添島君。それより、もう二度と君をここに連れて来なくても済むように、もう少し自重してくればそれで十分よ」

「ありがとうございます。飛田さん達にもよろしくお伝えください。

——ほら、行くぞ」

徹司は和洋の腕をとると、引き摺るようにして署内を出た。

「どうする、添島。家に帰るか」

助手席の和洋は黙ったまま窓の外に顔を向けている。

「そうだ。先生と一緒にラーメンでも食べないか。美味しい店を知ってるんだ」

和洋は窓に映る徹司の顔をちらりと見ると、ゆっくり首を振った。

「……もう眠たいから」

「それもそうだな。こんな夜中にラーメンもないよな」

徹司は和洋の家に向かって車を発進させた。

「なあ、添島」視線を前に向けたまま、徹司は訊ねた。

助手席に身体を埋める和洋は、「何だよ」と鼻を噉った。眠気のせいなのか目が赤くなっている。

「説教なら明日にしてくれ。疲れてんだよ」

「別に今更説教をする気はないさ」再び煙草に火を点けた。

「じゃあなんだよ」

「家にいるのがそんなに嫌か？」

和洋は何も答えず、目を閉じた。

火種

マンションの部屋の鍵を開けた。玄関先には姉のピンヒールと男物の革靴が無造作に転がっている。

「雌豚め」和洋は舌打ちすると、廊下の左手にある姉の部屋のドアを力任せに蹴った。

「何すんのよ！」

部屋の中から怒鳴り声が響くと、姉の美和が顔を出した。「いい加減にしてよ。大体今何時だと思ってるの」

美和は裸にタオルケットを巻いただけの姿だった。巻き髪は乱れ、化粧が斑に残っている。ちらりと部屋の中を見ると、奥のベッドの上には若い男が同じく裸で寝転がっていた。

「いい加減にするのはためえの方だろ。盛りのついた野良犬みたいに、毎日毎日男を連れ込みやがって」

「あんたには関係ないでしょ！」

美和は思い切りドアを閉めた。

「死にやがれ！ クソ女」

もう一度ドアを蹴りあげると、キッチンに向かった。

二十畳ほどあるリビングの灯りをつける。ロココ調の白い家具で統一された室内は乱雑に散らかり、ダイニングテーブルの上には美和と男が手をつけた酒瓶やコンビニの弁当の食べ残しが放置されたままだった。

冷蔵庫から炭酸飲料のペットボトルを取り出し、そのまま口の中に流し込む。ペットボトルを戻すと、缶ビールを手に、美和の部屋と廊下を挟んで反対側にある自分の部屋に入った。

水色の壁紙が貼られた部屋の中には、高校の入学祝に、と新調された黒い家具が並んでいる。漫画本が積まれたパソコンデスク、キヤビネットの上には最新のAV機器。煙草と整髪料が置きっぱなしのローテーブル。そして革張りのベッド。

和洋は洋服を脱ぐとハンガーにかけ、パジャマに着替えた。ビールと携帯電話片手にベッドに凭れかかる。新着メールが三件。どれも友人からのもので、大した内容ではない。そして留守番電話が一件。担任の篠原からだった。

「添島、ちゃんと帰ったか。さつきも言ったけど、家に居辛いのならいつでも先生の家に来いよ。何時でも迎えに行つてやるからな。だからもう、馬鹿な事を考えるのはよせ。お前だつて退学にはなりたくないだろう？ 高校を卒業して就職すれば、すぐに一人暮らしだつて出来るんだからな。分かるだろ。じゃあ、ゆっくりお休み。何かあればすぐに電話してくれ」

「どれだけお人好しなんだよ、こいつ」

そう呟いてテーブルの上に携帯電話を置いた。煙草とライターに手を伸ばす。壁時計の針は既に朝の四時を回っていた。煙草をふかしながら、篠原は寝る時間があるのだろうか、と考えた。篠原が顧問を務めるバスケット部は朝練がある筈だ。

和洋が一年生の時、篠原は副担任だった。担任は福田という人の良さを絵に書いたような人物で、篠原のかつての恩師だと聞いたことがある。二年生になる時、福田は定年を迎え、篠原がそのまま正担任となった。二メートル近いという長身の篠原は、逞しい外見と体育会系独特の気真面目さ、温厚な人柄で生徒たちからの人気も高く、信頼も厚い。

和洋も篠原の事が嫌いなわけではない。和洋が問題を起こす度、駆け付けてくれるのは篠原だけだ。何度も警察沙汰を起こしているが、未だに停学処分で済んでいるのも、篠原が学校側に執^とり成しているからだろう。口では悪態をつきながらも、どこかで篠原に甘えている自分がいることを自覚していた。

和洋が窃盗や恐喝などの問題行動を起こすようになったのは、高校に入学して数ヶ月経った頃からだった。中学時代から決して素行のいい生徒ではなかったが、補導されるようなことは滅多になかった。

ここ二年、貿易会社に勤める父親は年に数日しか家に戻らず、たまに家族が顔を合わせても会話らしい会話もない。美和は男に貢ぐためにキャバクラ嬢のアルバイトを始め、大学もまともに通っていない。母親は碌に家事もせず、趣味の海外旅行三昧で、子供たちの事情などお構いなしだった。

添島家の家族関係は、何時からか崩壊の一途を辿っていた。

「あんな親父だったらな……」

思わず口に出た。自嘲気味に鼻で笑う。「馬鹿臭え」

もう寝よう。煙草を揉み消し、ベッドに潜り込んだ時だった。足音とともに、美和の部屋のドアが開く音が聞こえた。何だろう、と思いつつ和洋は目を閉じた。枕元の目覚まし時計の針が進むとともに、ウトウトとまどろみ始めた頃だった。

「いい！ もっと、もっとお！」

美和の仰々しい喘ぎ声。ベッドが激しく軋む音。

わざと聞かせようとしているのだ。無視しようと耳を塞いだが、美和の声はますます大きくなっていく。

「くそっ！」和洋は立ち上がると、クローゼットからライターのオイル缶を取り出した。テーブルの上のジッポライターを握る。

美和の部屋のドアを乱暴に開いた。果たしてそこには長髪の男の上に馬乗りになり、大きな乳房を揺らす美和の姿があった。

「何だあ？ 偉く堂々とした覗きだな」

男は顔を上げ、にやにやと下卑た笑みを浮かべている。

「何よ。出て行きなさいよ！」

そう言いながらも美和は腰を動かし続けた。

豹柄のカーペットの上に脱ぎ散らかされた衣類。噓せかえる情事の臭い。思わず吐きそうになった。

「……死ね」小さく呟く。

「はあ？ 何言ってるんの、あんた。もしかして私たちのセックスをおかずにしようと思ってるんじゃないの」

美和は一重の目を一層細くした。「どうせあっちの皮もむけてな

い馬鹿のくせに、生意気なのよ」

「いいじゃねえか。見せてやれよ。こいつ童貞なんだろ」

男は美和の尻を掴むと、激しく腰を突きあげた。

「ああっ！」陰部が卑猥な音を立てる。美和は口を半開きにし、身体をくねらせた。

「おい、童貞。これが生のセックスだよ。アダルトビデオなんかよりよっぽど迫力があるだろ？」

醜態をさらし続ける二人に、和洋は激しい嫌悪感を覚えた。「このクソどもめ！」

オイル缶を美和に向かって強く握った。噴き出たオイルが美和の髪を濡らしていく。

「な、なによこれ」美和は突然の出来事に腰の動きを止めた。胸元にもオイルが滴る。

男は鼻をひくひくさせると、「ライターのオイルじゃねえか！」

と慌てて身を起こした。「何するんだよ、このガキ！」

「動くな！」

和洋はライターの火をつけた。二人の動きが止まり、顔を強張らせる。

「ちよつとやめてよ、和洋。いくらなんでも洒落にならない、つてば」

「そうだよ。本当にそれはマズイって。俺たちが悪かったよ。済まなかった。だから馬鹿な事するな。な？」

二人はなんとか宥めようとするが、ライターを握る和洋の目は本気だった。

「黙れ。少しでも動いたらこれを投げるぞ」

腕を伸ばし、左右に炎を揺らす。「雌豚の丸焼きにしてやる」

「いい加減にしろ！」

男が立ちあがろうとした瞬間、和洋はライターを投げつけた。

「きゃあ！」美和は咄嗟にベッドから転がり落ちた。ライターはシートの上に落ち、ベッドに小さな炎が上がる。

「外したか」和洋は舌打ちした。

床の上で四つん這いになる美和の目は、恐怖で見開かれていた。

「あ、あんた……」

男は床に転がっていた毛布を拾うと、素早く炎の上に被せた。撒かれたオイルの量が少なかったのか、火はすぐに消し止められた。

「危なかった……」

男は額の汗を腕で拭い息をついた。「何てことするんだよ、この糞ガキ！ 俺たちを殺す気か！」

「やめて！」美和は和洋に殴りかかろうとする男の背中にしがみ付いた。「この子ったら本当におかしくなっているのよ。相手にしちゃ駄目！」

「だけどこいつが悪いんじゃないか。お前だって大火傷するところだったんだぞ！」

「ふん」和洋は平然としたまま、鼻で笑った。「何を言ってやがる。先にちよっかいを出してきたのはその豚の方じゃねえか。お前もこんな尻軽のブスにしか相手にされねえ三下のくせに偉そうに言ってるじゃねえよ。この短小野郎」

「なんだと！」男は美和を引き摺りながら和洋に詰め寄ると、パジャマの襟元を掴んだ。「本当に殺されたいのか、この——」

言い切らないうちに、男の鼻筋に和洋の拳がめり込む。

「がっ……」男は白目を剥き、その場に崩れ落ちた。

「汚え手で触るんじゃないやねえよ、この外道が」

右の拳を握ったまま和洋は吐き捨てた。

「やめて！」動かない男を庇いながら、弟の顔を睨みつけた。「早くここから出て行って。あんたみたいな馬鹿はさっさと死ねばいいのよ！」

「ああ、言われなくても出て行ってやるよ。だけど頭が狂っているのは、一体どっちの方なんだろうな」

そう言つとドレスサーの上のコンドームの空箱を投げつけた。

土曜日の授業を終え、和洋は家に戻った。いつものように鞆を部屋の前に置くと真っ先にキッチンに向かう。

リビングの中は塵一つなく整然としていた。母親がにこやかに息子を迎える。「お帰り、和君。早かったのね。真面目に授業は受けてきたの？」

綺麗にセットされた髪。赤い口紅と洒落たワンピース姿の母親は猫撫で声を上げた。

帰って来やがったのか。心の中で呟く。

「久しぶりだね、和君。どうだい、学校の方は」

ソファーに軽く腰かけ、紅茶の入ったティーカップを片手に、長内卓は笑顔を向けた。「最近成績が落ちているとお母さんに聞いて心配していたんだよ」

いかにもインテリといった風貌。繊細な顔立ちには縁無し眼鏡。

「そうですか」

長内は和洋が中学生時代の家庭教師だった。当時大学院生だった長内は、お世辞にも頭がいいとは言えない和洋に、根気よく指導を続けた。今通う高校に合格出来たのは、正に長内の助力の賜物だろう。時折エリート風を吹かせるなど鼻につくところもあるが、優秀な家庭教師であったことは間違いない。だがその眼鏡の下に隠れたもう一つの顔を知ってからというもの、長内への感謝も尊敬の念も何処かに飛んで行ってしまった。

「少し話さないか？」

長内に促されるまま、和洋は向かいの椅子に腰を下ろした。テーブルの上に炭酸飲料と母親が焼いたクッキーが並べられる。和洋はそっとクッキーの入った皿を前に押しやった。

「用件って何ですか。俺、今から友達と遊ぶ約束をしてるんですけど」

嘘だった。取って付けた様な笑みを浮かべる二人の顔を見たくないだけだった。

「まあ、そう言うなよ」

長内は苦笑した。「男同士、積もる話もあるだろう」

「別に」素気なく答える。「話し相手なんて幾らでもいますから」

「なんて事を言うの、和君。長内先生は最近の和君のことを心配して、わざわざ家にいらしてくれたのよ」

母親が窘めた。「ごめんなさいね、長内先生。本当に困った子で、私も手を焼いているのよ」

「いいえ。僕も学生の時はこんなものでしたよ。むしろ和君の年頃なら当たり前じゃないですか」

長内は「なあ」と白い歯を覗かせた。

「そう言つて頂けると安心ですけど」

長内の隣に座った母親は、紅茶のおかわりを注いだ。花柄のカップから、湯気とともに甘い匂いが立ち込める。

「先生、クッキーを一口召しあがってくださいませんか？ 私が育てたハーブが入っているんですよ」

長内は目を丸くした。「そんな趣味まであるんですか。流石ですねえ」

なんて茶番だ。膝に視線を落とした。どいつもこいつも、信用なんて出来るか。和洋はコップの炭酸飲料を一気に飲み干すと、すくと立ち上がった。「出かけてくる」

母親は腰を浮かせた。「そんなこと言わないで、和君も一緒にお昼ご飯を食べましょうよ」

「外で待たせてるから」

「そう？」

和君も一緒に――。どれだけ取り繕つても、本音は隠せない。この二人が不倫関係にあることは、和洋も薄々勘付いていた。五十歳近い母親と、二十代の長内が、姉のように淫らな行為をしているかと考えるだけで吐き気がした。

制服のままマンションの部屋を出ると、和洋はポケットの中の携帯電話を取り出した。液晶画面に見慣れた名前と顔写真が写る。二

コールほどで電話は繋がった。

「もしもし、誠？ 俺だけど」

「よう。カズか。久しぶりだな」

明るい声とともに、蕎麦を啜る音が聞こえた。

「わりい、昼飯の最中か。掛け直そうか」

「今食い終わったからいいよ。それに丁度俺の方からカズに電話をしようと思っていたところなんだ」

幼馴染の嶋田誠しまだまことの父親は二年ほど前に急死した。以来誠は家計を助ける為に歳を誤魔化しバイトに明け暮れていたこともある。中学を卒業してから進学もせず、建築現場で鳶の仕事をしていた。来春には上の妹の高校進学も控えていた。

マンションからほど近いコンビニエンスストアの前まで来ると、和洋は駐車場の車止めに腰を下ろした。

「俺に電話、って、何かあったのか？」

「いいや。俺はいつも通りだよ。親方にケツを叩かれ、現場監督には怒鳴られ、ってところだな」

誠の屈託のない、大きな笑い声が耳元に響く。「あのさ、夕方の五時ごろ俺の家に来ないか？」

「五時？ まだ仕事が残っているんじゃないのか」

「いや。今日はお袋の誕生日だから早上がりさせて貰うことになってるんだ。お袋も賑やかな方が楽しいだろうから、カズも来てくれよ」

幼い頃から誠の家に頻繁に出入りしている和洋は、誠の母親や二人の妹の事もよく知っていた。誠の母は、息子の幼馴染の和洋を可愛がってくれている。妹たちも和洋の事を「カズ兄ちゃん」と呼んで懐いていた。

中学生時代、勉強が苦手で喧嘩っ早い誠は、和洋と同じく「落ちこぼれ」と呼ばれていたが、今では一人前の社会人として一家を支えている。同じ歳なのに遥かにしっかりしている誠の事が羨ましくもあり、自慢の親友でもあった。

「妹たちはケーキを焼く、って言ってたし、俺もお袋の好きなちらし寿司でも作ろうかな、って思ってるんだ。カズは料理が得意だろ。時間があるなら手伝ってくれないか」

料理が得意、というほどでもないが、母親が家を空けることが多いため、夜食などの簡単な食事を作る機会は多かった。

「そりゃ構わないけど、俺なんかが顔を出したら、お袋さんの迷惑になるんじゃないのか」

「何言ってるんだよ。しょっちゅう俺んちで飯食ってるくせに、今更遠慮してどうするんだ」

「そりゃそうかもしれないけど」

誠の母の誕生日に呼んで貰えることは素直に嬉しかった。それに母と長内がいる家に戻る気がしない和洋にとって、誠の誘いはまさに渡りに船だった。

「分かった。じゃあそれくらいの時間に行くよ。誘ってくれてサンキュー」

「おう、待ってるからな」

電話が切れると、財布の中身を確認した。千円札が一枚と小銭が少し。プレゼントを選ぶにはあまりにも心許ない。いくら誠の母親の誕生日とはいえ、呼ばれておいて手ぶらという訳にもいかないだろう。

「しょうがねえな」

机の中に幾らか入っていた筈だ。ついでに着替えも済ませてしまおう。和洋は立ち上がると尻についた埃を払った。

プレゼントは何がいいだろう。和洋は誠の家の様子思い返した。古い団地の一室だが、部屋の中は何時もいい匂いがしていた。玄関先と居間には綺麗な硝子細工の皿と、色のついた蠟燭が置いてあった。あれがアロマキャンドルという物なのだろう。下手なものを贈るより同じようなものを買った方が間違いないかもしれない。

誠の母の喜ぶ顔を想像しつつ、和洋は家に向かった。

業火

玄関は施錠されていた。音を立てぬよう、ティンブルキーをゆつくり回す。長内の靴は見当たらないが、室内からは確かに人の気配がする。リビングの奥にある寝室にしけこんでいるのだろう。和洋は自分の部屋に入ると、机の引出しから貯金箱代わりのペンケースを取り出した。

「あれ？」思わず首を捻った。一昨日確認した時には確かに万札が三枚入っていた筈なのに、ペンケースの中は空だった。引出しの中の物を全て取り出し、何度も覗いてみたが、金はどこにもない。

「あの女め」美和か美和の部屋に出入りしている男の仕業に違いない。そう思った和洋は握った拳を壁に打ち付けた。「ぶっ殺してやる」

丁度その時、美和の声が玄関先で聞こえた。「ただいまあ」

和洋は部屋を飛び出した。美和の前で仁王立ちになる。「てめえ、俺の金盗みやがったな！」

「はあ？ 何言ってるのよ、あんた」

男の家に泊まり込んでいたらしい美和は、昼間だというのに酒の匂いを漂わせていた。大きなバッグの中には化粧品やキャバクラで着るドレスが無造作に突っ込まれている。「邪魔よ。ちよっとどいてくれない」

「しらばっくれてるんじゃないよ！」

屈んでヒールのバックルを外そうとする美和の髪を、和洋はぐつと掴み上げた。

「何すんのよ！ 放してよ、この馬鹿！」

「金を返すのが先だろうが！」

美和の頭を左右に激しく振る。

「痛いってば！ 知らないわよ、あんたの金なんか」

「お前ら以外に俺の金を盗む奴がいる訳ないだろ」

「冗談じゃないわよ。あんたのしけた小遣いなんて一日で稼げるのに、そんな事する訳ないじゃない」

美和は中腰の姿勢のまま、和洋の向う脛を思い切り蹴り飛ばした。「痛ってえ！」手が離れた勢いで廊下に尻餅をつく。

「ふざけるんじゃないわよ！」

髪を乱し、怒りで頬を真っ赤にしながら、弟の顔面目掛けてバッグを打ち付けた。「あの貧乏院生じゃあるまいし、私がそんな真似する訳ないじゃないの」

「院生？ 長内の事かよ」

「ふふん」廊下に倒れたままの和洋を嘲るように美和は笑った。「そう、その長内。あいつ、就職もせずにママと寝て小銭を貰ってんのよ。あんただって気付いているんでしょ」

和洋はバッグの金具が当たった鼻を嚙りながら、あることを思い出していた。

「でも駄目ね。先月ママとバンコクに一緒に行った男の方が、よっぽど顔も身体付きも良かったし、あっちも強そうだったわ。長内なんて今までの男と少し毛色が変わってるからママも興味を持っただけで、どうせすぐに飽きられるわよ」

「何してるの、美和ちゃんたち！」

姉弟の諍う声に驚いた母親が顔を出した。子供たちの様子に眉をひそめる。「喧嘩ばかりするのはいい加減やめてちょうだい」

出掛ける前とは異なる、地味な Cotton のワンピース。束ねただけの乱れた髪。長内との情事の途中、慌てて着たのだろう。

「本当にあなた達ときたら」

母親は頬に片手を添え、わざとらしく溜息を吐いた。「どっちももう子供じゃないんだから、もう少し落ち着いてもらわないと困るわ」

「だけどママ。カズったらいきなり難癖付けて来て、私に暴力を振るったのよ」

先程までとは打って変わった、鼻にかかる甘えた口調。「何もし

てないのに泥棒扱いされたのよ。酷いと思わない？」

「本当なの、和君？」母親は目を丸くした。「高校生にもなつて困った子ねえ」

和洋はゆっくりと立ち上がった。こめかみがズキズキと痛む。「どけよ」

「駄目よ、和君。まだ美和ちゃんに謝つてないでしょう」

「知るか」そう吐き捨てる、母親の脇をすり抜け、リビングに向かった。

キャビネットの上には写真立てが飾られている。両親の結婚式、子供たちの七五三。初めての家族旅行。幼い姉弟を抱く両親の笑顔。和洋は唇をきつく噛むと、両親の寝室の扉を開けた。

「おい、長内」

長内は凍りついたように動きを止めた。ダブルベッドに腰かける長内はランニングシャツにトランクス姿で、チノパンに足を通そうとするところだった。

「違うんだ」長内は焦りながら何度も首を左右に振った。「その、これは、あれだ。これはほんの出来心で、決して和君が考えるような事じゃなくて、つまり誤解なんだ」

澀んだ空気を誤魔化そうとしたのか、ベランダのサッシは大きく開け放たれている。和洋は長内には目もくれず、黙ってハンガーにかけられた長内のジャケットをまさぐった。

「何しているんだよ、和君」

内ポケットの中から、細かく折られた痕がはつきりと残る万札が三枚出てきた。ペンケースに入れておいた金に違いはない。和洋は万札を握りしめると、長内を睨みつけた。「おい、この金はどうした」「あ……」長内の表情が強張っていく。

「やっぱりあんたがコソ泥だったのか」

和洋の部屋に頻繁に出入りしていたのは母親でも姉でもなく、家庭教師である長内だった。以前、「これが万札のワイシャツ折りだよ。面白いだろ」と、ペンケースの中の変形折された札を見せた事

もある。

「何の事かな」長内は咳払いをした。「僕が泥棒だつて？　つまりない言掛りをつけるのは止して欲しいな」

「言掛り？　じゃあなんで俺の金があんたの懐の中にあるんだよ」

「ちよつと待てよ、和君。それが君のものがどうかなんて誰にも解らないだろう」

長内は苛立つたようにチノパンを握りしめた。「それともその金には君のものだ、という証拠でも書いてあるのか」

「証拠ならあんたの態度だけで充分だろ」

「ちよつと。いい加減にしなさい、和洋」

母親が口を挟む。「先生に対して失礼でしょう」

「失礼？」ベッドの方を顎でしゃくつて見せた。「他人の家で裸同然で寝ている方がよほど失礼じゃないのかよ」

「誤解よ。先生は少し気分が優れないようだったから、横になつて頂いていただけなのよ」

母親は息子の腕を掴んだ。「ほら、そんなことより温かいお茶でも飲んで落ち着きましょう」

「うるせえ！」和洋はその手を払いのけた。勢いで母親の足元がふらつく。「汚ねえ手で触るんじゃないやねえよ！」

「き、汚い、ですって」

目を見開いた母親は唇を震わせた。「親に向かつてなんて事を言うの」

「親？　誰が親だ。誰が先生だ」

母親と長内を交互に睨みつけながら、全身は言いようのない憤りに震えていた。

有り余る時間と小金を餌に、次々に若い男を銜え込む母親。

妻の不貞を知りながらも黙殺し、帰国の際は愛人の元へ入り浸る父親。

「和洋、ママに謝りなさいよ」

自由と金の為に両親に媚び、セックスでしか己の欲望を満たせな

い姉。

「そうだよ和君。お母さんに乱暴はよくないよ」

エリートコースから滑り落ち、親子ほど年の離れた女と寝て小銭をせびりつつ、なお「いい人」ぶる愚かな男。

「——死ね」和洋の中で何かが弾けた。

「てめえらなんかみんな死んじまえ！」

サイドテーブルの上の花瓶を掴むと、美和に向かって投げつけた。ゴン、という鈍い音とともに、美和の額から鮮血が飛び散る。「なっ……」

何が起こったのか理解出来ないまま、美和は前のめりに床に崩れ落ちた。白いフローリングの上に血溜まりが出来る。

「美和！」

「美和ちゃん！」長内も慌てて立ち上がったが、穿きかけのズボンに足をとられ、その場でつんのめった。

母親は血相を変えながら娘を抱きかかえた。「美和、美和。大丈夫？　しっかりして！」

目を閉じたまま美和は呻き声を上げた。「ママ……。痛いよ」

「和洋！　あんたって子は何てことをするの！」

「黙れ！」声を荒げる母親の背中を力任せに蹴飛ばした。「うるせえんだよ！　クソババア」

倒れ込んだ母親の上に馬乗りになると、頭部や顔を執拗に殴り続けた。「畜生。畜生。畜生め！」

大振りのピアスが指に引っかかり、拳を振り上げた勢いで母親の耳たぶを切り裂く。

「ひいいっ！」悲鳴を上げる母親の首筋は血で染まり、顔面が恐怖で引き攣る。

「やめろ、和君。やめるんだ！」

長内は和洋を背後から羽交い絞めにした。「馬鹿な事をするんじゃない！」

「うるせえんだよ。こいつらもてめえも殺してやる！」

和洋は後頭部を長内の顎に思い切り打ち付けた。頭突きをまともに喰らった長内の唇が切れ、血が滲む。

「何しやがる、この馬鹿ガキ！」

立ち上がった長内は和洋の胸座を引つ張り上げた。眼鏡の奥の瞳は憤怒と興奮で血走っている。「お前みたいな馬鹿をS校に入れてやった恩を忘れたのか」

「はあん」和洋は長内に顔を近づけると、薄ら笑みを浮かべた。

「……何が可笑しい」

「それがてめえの本音なんだろ。エリート風ばかり吹かしやがって誰が先生だ。誰が立派な大人だ。聞いて呆れらあ」

和洋は長内の細い手首を逆手に握り返すと、背中側に思い切り捻りあげた。

長内はうつ、と呻きながら上半身を振らせる。「は、放せ！」

「聞こえねえな」

長内は必死に和洋から逃れようとするが、掴まれた腕はびくともしない。

「形が小さいからって、なめるんじゃないぞ。チビにはチビの喧嘩の仕方っていうものがあるんだからな」

和洋は長内の身体をベランダに引き摺り出した。十五階の部屋の下にはコンクリートの駐車場が広がり、時折吹く強い風が壁に当たり不気味な音を立てている。

和洋は肩を長内の背中に押し付けた。長内の上腹部が手すりに密着する。そして空いた手で頭を地面に向けさせた。

「や、やめてくれ。こんなことをして万が一の事があったら、冗談じゃ済まないんだぞ」

「残念ながら、冗談じゃないんだよ」

頭を激しく振られた長内の眼鏡が外れ、駐車場に落ちた。長内の全身から脂汗が滲む。「は、放せ。放してくれ。僕まで落ちたらどうするんだ」

「放して欲しけりや今ここで誓え。二度と家に入ったりしない、って

な」

「わ、解ったよ。二度とお袋さんには近づかない。この家にも来ない。それでいいんだろう」

「何か勘違いしてないか」

和洋は長内の背中越しに囁いた。「薄汚えババアとてめえが何しようが、正直俺にはどうでもいいんだよ。小銭が欲しけりや、セックスでもなんでもやってやれ。あのババアも姉貴もそれしか考えてないんだからな。それより、俺の金を盗んだことをさっさと認めるじゃねえと警察に突き出してやるからな」

警察、の言葉に長内の頬が歪んだ。「す、済まなかった。やつと決まった就職先が倒産して、本当に金に困っていたんだ。魔が差したとしか言いようがない。あの金は返すから勘弁してくれ」

「本当に解ってるんだろうな」

「ああ。悪かった」

和洋は長内の腕を放した。長内は手すりに凭れ何度も深呼吸する。その身体は小刻みに震えていた。

「いつまでもそんな処に突っ立ってんじゃねえよ。邪魔だ。さっさと出て行け」

顎でしゃくった先では、血塗れの母親が娘を抱きかかえ怯えるように様子を窺っている。

「解ってるよ。だけど僕が出て行った後、二人をどうするつもりなんだ」

「そんなの知ったことか。そんなに奴らが気になるんなら、病院でも警察にでも勝手に連絡しやがれ」

そう言っただけで和洋は背中を向けた。

「ちよつと待てよ」

「何の用だよ」和洋の顔が再び気色ばむ。

「自分で何をしたのか解っているのか。これは犯罪なんだ。お前……和君が二人にした事が病院に知れたら、傷害罪どころか殺人未遂で逮捕されかねないんだぞ」

「それがどうした。病院にでも警察にでも行け、って言ったのは俺の方だろうが」

「今なら間に合う。自首を――」

「ふざけるな！」和洋は振り向きざま、長内の首を力任せに絞め上げた。「何が自首だ。犯罪者はてめえらの方じゃないか。それともそんなに俺を警察に突き出したいのかよ」

「がっ。べ、べ、別に、そんなつ、もりじゃ」

長内は息苦しさに爪先立ちになった。和洋の両手首を強く握るが、和洋の指先は長内の細い首にしっかりと食い込んでいる。「ぐ、ぐる、苦しい……はな、放して、ぐれ」

「てめえを殺して刑務所に入れられても俺は構わないぜ。こんな腐った連中のいる家の中より檻の中の方がよほど天国だろうしな」

呻き声を上げる長内の顔は恐怖に歪み、充血した目には涙が浮かんでいる。「ほ、本当に、済まな……かった。もう、な、何も言わない。だ、だから、もうやめてくれ」

「うるせえんだよ。誰がてめえの言う事なんか信用するか」

「やめなさい、和洋！」

背後から母親が飛び付いた。「私が悪いのよ。私たちが悪かったの。だからこんなことはやめなさい！」

「どけっ」母親を肘で振り払った。足元の覚束おぼつかない母親は人工芝の上に倒れ込む。

「そ、そうだ、和君。お、俺が悪かった」

やっと和洋の手から解放された長内は、何度も咳込み首を振った。

「和君が言うように僕は泥棒だ。認める。だから和君も馬鹿な事をするのは止せ」

「馬鹿なこと？」

「そうだ。暴力では何も変わらないし、何も得られないだろう」

何も変わらず、何も得られない――。

脳裏にあらゆる声が響き渡り、和洋の思考を呑み込んでいく。

「お前は俺の生徒だからな。俺も添島にとっては担任の先生だろう。」

だからだよ」

どんな事を為^し出かしても、根気よく見守ってくれる担任の篠原。篠原に連れられて真夜中に訪問した時、「疲れたでしょう。これでもおあがりなさい」と温かい夜食を作ってくれた篠原の妻。安心してしまった顔で並んで眠る幼い子供たち。

「添島も何時までも子供じゃないんだから、あんまり担任の先生に心配ばかりかけるもんじゃないぞ。このままじゃ篠原君も角刈り先生から若禿げ先生になりかねんからな」

何度補導されても、近所の小父さんのように気さくに、そして厳しく指導してくれる飛田刑事。

「これ、好きだったでしょう」

事務的な口調のまま、他の刑事の目を盗んでそつと缶ジュースを差入れてくれる鳥井巡査。

そして誰よりも大切な、幼馴染で親友の誠。

病弱だが穏やかで優しい誠の母。決して楽ではないであろう生活の中、母と兄を気遣い笑顔を絶やさぬ妹たち。

「家族」の肖像。

欲しいものはいつでも傍にあるのに、決して手の中に納まる事はない。

「違う。違う。違う！」

和洋は両耳を押さえ、咆哮するように声を上げた。「俺は何も欲しくなんてない！」

「か、和洋……」母親は呆然と息子を見上げた。

「嘘はいらないだけだ！」

目の前の現実を消し去りたい。ただそれだけだった。

和洋はベランダに足を掛けた。手すりから大きく身を乗り出す。

「嘘だらけの世界なんていらないだけなんだ！」

「和君！」長内は咄嗟に和洋の腰を掴んだ。片手が和洋のベルトに食い込む。「危ないっ！」

「やめてっ。和洋。やめなさいっ！」

その瞬間、和洋の身体は強い風に煽られた。バランスを崩し、手すりを掴む両手が離れる。

「あっ……」

奇妙な浮遊感と風を切る音。二人の身体は宙に投げ出された。

「和洋っ！ 先生っ！」

母親の絶叫とともに、黒いコンクリートの地面が二人の目の前に迫っていた。

残滓

体育教官室の電話が鳴った。

受話器を取った内川が声を上げる。「篠原先生、鳥井さんという方から直通電話が入っています」

「あ、ああ」鳥井の名前に一瞬緊張した。日報を書く手を止める。やはり和洋の事だろうか。このところ真面目に登校していたし、精神的にも落ち着いているように見えたのだが。軽く咳払いをしてから受話器を受け取った。「もしもし、お電話代わりました。篠原です」

「少年課の鳥井です。お忙しいところ申し訳ありません」

向かいの席に座る新任の内川は、女性からの電話に興味津々、といった顔をしている。徹司は口元に右手を添え、声を潜めた。

「あの、添島がまた何かやらかしたんでしょうか」

「いいえ、そういう事ではありません」

いつもの口調だが、普段より声のトーンが幾分低い。徹司は嫌な予感がした。

「今日の午後二時ごろ、添島君が亡くなりました。自宅マンションのベランダから、転落したようです」

「は？」思わず素頓狂な声を上げた。大きな声に驚いたのか、内川も目を丸くする。

「すみません。よく聞き取れなかったのですが」

「添島君の中学生時代の家庭教師だった男性とともに転落死しました。現在、事件として当署で調べを進めています」

鳥井の言葉の意味を理解するのに数秒かった。「ええと。添島が家庭教師の方と一緒にベランダから落ちて死んだ、っていうことですか」

内川は更に目を見開き、「大変だ……」と顔色を変えた。

「その通りです。まだ詳しいことは言えないのですが、死亡した二

人がベランダで揉み合っていた、という目撃情報もあります。それから彼の母親と大学生の姉も添島君に怪我を負わされたという事で病院へ運ばれました。姉の方は脳挫傷を起こしており重体です」

「まさか、添島が……」

徹司は呆然として天井を見つめた。「それで、僕はどうすれば……」

「いえ。これはあくまでも篠原先生へのご報告です。校長先生にはこちらの上司から既に連絡が入っている筈です。ただ、週明けにはマスコミも学校に押し掛けると思いますので、生徒たちへの対処をお願いします」

「はあ」上の空で答える。「マスコミですね」

「私たちもこれから現場に向かいますので、何か御用があれば携帯の方に連絡してください。それでは失礼します」

電話が切れた後も徹司は動けずにいた。頭の中が混乱し、状況の整理が全く出来ない。手の中の受話器からはツー、という音が鳴り続けていた。

「あの」内川が徹司の顔を心配そうに覗き込んだ。「篠原先生、顔が真っ青ですよ。その、添島君はただの事故死じゃないんですか」

「そう……らしいな」

力なく答えた時、校内放送が流れた。「在校中の先生方、緊急の職員会議を行います。至急会議室にお集まりください。繰り返し……」

「もしかしてこれって……」

スピーカーを指差した内川に、徹司は黙って頷いた。体育館から聞こえる賑やかな声。校庭を駆け回るユニフォーム姿の生徒たち。いつもの土曜日の午後の光景が、何処か遠くに感じられた。

関係者が集まる中、所轄の刑事が事件の概要を説明した。

時間が経つにつれ、徹司の頭の中も大分はつきりしてきた。だが和洋が家族に大怪我を負わせた上、家庭教師をベランダから突き落

し転落死させたなどと、とてもではないが信じられない。せめて家の中の様子を見る事が出来れば、添島家に何が起きたのか想像がつくのではないか。そう考えた徹司は会議が終了すると和洋の家へ向かった。

既に午後八時を回っているが、マンションの敷地内は人で溢れていた。ひそひそと囁き合う近隣の住人達。興奮気味の主婦にマイクを向けるマスコミ関係者。同情の言葉を並べながらも、その顔はみな一様に好奇心と嘲笑に満ちている。

十五階の廊下の奥手にある添島家の玄関先には、「KEEP OUT」と書かれた黄色いテープが張り巡らされ、傍らには制服姿の警察官が立っていた。

「すみません。添島和洋の担任教師の篠原という者ですが、鳥井巡查はいらっしゃいませんか」

警察官は徹司の正体を認めると、「ああ、あなたですか」と頷いた。「篠原さんの事は鳥井から伺っております。鳥井は署の方に戻りましたが、お急ぎでしたら私から連絡しましょうか」

個人的な用件で警察官の手を煩わせる訳にはいかない。徹司は首を振った。「いえ、結構です。それより、中の様子を見せて頂く訳にはいきませんか。何も触ったりはしませんし、ご迷惑はかけませんから」

「残念ですが、まだ現場検証も終わっていませんし、私の一存ではなんとも……」

徹司より一回りも年若い警察官は、申し訳なさそうに首を傾げた。「いえ。仕方ありません。こちらこそ勝手なお願いをして申し訳ありません」

やはり鳥井がいなければ無理か。明日にでも出直そう。軽く会釈を交わすと、徹司は踵を返した。

「——あのう。もしかして篠原先生ですか」

エレベーターホールで一人の少年に声を掛けられた。半袖のシャツから覗く、細身だが筋肉質な身体つき。坊主頭に浅黒く焼けた肌。

臉は泣き腫らしたように赤く膨らんでいた。

「そうだけど、君は……」

在校する男子生徒の顔と名前は殆ど把握しているが、目の前の少年には全く見覚えがない。徹司は戸惑ったように尋ねた。「S高校の生徒ではないよね？」

「カズ……添島和洋君の友達の嶋田誠です。高校には通っていません」

マコト、という名前には聞き覚えがあった。

まだ徹司が副担任だった頃、大学進学を望まない和洋が進路調査書を白紙のまま提出した事がある。当然進路指導室に呼び出された和洋だが、「俺みたいな馬鹿が本当に大学に行けると思ってるわけ」と、担当教諭二人を前に平然と言った。

「あのさあ。俺の幼馴染でマコト、って奴がいるんだけど、俺と同じで勉強は出来ないし、中学の時なんて他の中学の奴ら相手に喧嘩三昧だったんだ。だけど二年くらい前に親父さんが急に亡くなっさ。俺が親父の代わりに大黒柱になるんだ、とか言って大人しくなっさあ。中学を出てすぐ建設会社に入ったんだよ。今は親方にも認められているし、とにかく家族想いで、すげえ気持ちのいい奴なんだよ。フグタも篠原も大学大学、って言うけど、人間って学歴が全てじゃねえと思うんだよな」

正担任の福田も「添島もたまには正論を言うんだな」と苦笑していた。事実、和洋の成績では進学どころか進級も怪しい、という状況だった。

だがそれより、校内でも浮いた存在の和洋に信頼出来るいい友人がいると知って安堵した事があった。何より、幼馴染の少年のことを話す時の誇らしい顔つきが印象的だった。

「君が添島の幼馴染か」

ええ、と頷くと、誠は背の高さを示すように片手を上げた。「篠原先生の事はよくカズから聞いていたんで、もしかしたら、と思っ
て」

徹司は照れたように鼻先を掻いた。「そうか……。僕も添島から君の話を聞いた事があるよ。お父さんが亡くなったようだけど、とても頑張って働いているそうだね。それに君のことを、すごくいい奴だ、って褒めていたよ」

「そうですか」少し微笑んだ誠の顔が、すぐに泣き顔に変わった。

「今日、カズは俺の家に来る予定だったんです。カズと俺たちでお袋の誕生日を祝おうって。でも約束の時間になっても来なくて、連絡もつかないし、どうしたんだろう、って思っていたら、テレビのニュースでカズが死んだって……。しかもカズが人殺し、みたいな報道がされていて。俺、どうしていいか本当に分からなくて。ここに来たってどうしようもない事ぐらい分かっているけど、それでも居ても立っても居られなくなって」

誠は鼻を噉ると、溢れる涙を腕で拭った。「先生。カズは勉強なんて嫌いだし、確かにちよつと気が短いところはあるけど、理由もなく暴力を振るうような奴じゃないんです。本当は、すごく優しくていい奴なんです」

「ああ。みんな知っているよ」

徹司は俯く誠の肩を強く掴んだ。「添島は感情表現が不器用だから、勘違いされやすいだけなんだ。その証拠に自分が悪い時には反省もするし、ちゃんとゴメン、って謝るだろう。しかも、添島には嶋田君という素晴らしい親友もいる。そんな人間が悪人であるはずがないじゃないか」

徹司は膝を屈めると、視線を誠の身長に合わせた。まだあどけなさの残る顔を見つめる。「マスコミは事件をショッキングに伝えて世論を煽るものだし、周りの人たちだってみんながみんな添島のことを知っている訳じゃない。だけど僕も君もあいつのことをよく知っている。僕や君が添島の事を信じてやらないでどうする」

「そうですよね」誠は何度も何度も頷いた。「カズが人殺しだなんて、きつと何かの間違いですよ」

「そうとも。明日になれば本当の事が解るよ。これはただの事故な

んだ。添島がお母さんやお姉さんに怪我を負わせたのも、きっと何か理由があるんだろう」

徹司は誠の瞳に映る自身の姿に、そう言い聞かせていた。

週が明け、学校側はマスコミ対策に神経を尖らせていたが、大物政治家の汚職問題が大々的に報道された影響で、和洋の事件の扱いは比較的小さく、学校周辺のマスコミ関係者の姿も疎らだった。そして三日も経てば報道される事もなくなった。それでもしばらくの間、校内は和洋の話題で持ち切りだった。特に徹司の担任するクラスの生徒たちは騒然として落ち着かず、授業にならない日もあった。

他の教師や校長からの叱責、教育委員会やPTAなどへの陳謝と事情説明、そして生徒からの質問攻めから解放されたのは、和洋が死亡して十日以上も経ってからだった。事件は当初の見解通り、和洋が母親と姉に暴行を加えた上、止めに入った長内と揉み合いになり転落死した、ということとで落ち着いた。だが何故和洋がそのような行動に走ったのかは明らかにされなかった。

担任教師として結局何の力にもなれなかった、という虚無感と無力感。多忙を極めた日々の中、徹司の思考は澱のように沈んだままだった。

放課後の体育館。徹司は久しぶりに顧問するバスケット部の指導に当たっていた。高校生とはいえバスケットボールの強豪として知られるS高校の練習量は半端ではない。何時までも教官室に引き籠っている訳にも行かなかった。

「篠原先生、電話が鳴ってるみたいですよ」

傍らの女子マネージャーが床に置いたジャージを指差した。

「ああ。悪いな」

徹司は発信者の名前を確認すると、「すぐに戻る」と言い、渡り廊下に出た。「もしもし」

「俺だよ。今電話大丈夫か？」

高校時代の同級生、平岡将人からだった。

周りを見渡し人気の少ないことを確認した。「少しなら問題ないよ」

「色々大変だったみたいだな。本当はもっと早く電話しようと思っ
ていたんだけど」

「気にするなよ。平岡こそ仕事が忙しいんだろう」

「いやあ。この不景気で売上もさっぱりだからなあ。正直公務員が羨ましいよ」

電話の向こうで苦笑する声が聞こえた。将人は大手自動車メーカーのトップセールスマンで、今は三十代の若さで支店長を務めている。

学生時代から特に親しい、というわけではないが、俊介の墓参りなどで二人が会う機会は多かった。そして将人は徹司同様、俊介の死の原因を知っている人間の一人でもある。

当たり障りのない挨拶を交わした後、将人は遠慮がちに尋ねた。

「それで、三沢さんの具合はどうなんだ」

「ああ」徹司はふと息をついた。「もってあと一月だそうだ」

「あと一月……」しばらくの沈黙ののち、将人は「そうか……」と呟いた。

奏子と大学病院で再会してから、折に触れて将人に奏子の病状は説明していた。だが将人が奏子を見舞う事は決してなかった。

「何度も言うようだけど、俺にそんな事を訊く位なら、一度でもいいから見舞いに行つてやれよ。もう一生会えなくなるんだぞ。このままじゃ平岡も後悔するのは目に見えているじゃないか」

「俺だってそんな事くらい解つてるよ」

将人は声を荒げた。「だけど今更どんな顔をして三沢さんに会え、
つて言うんだ。それにお前だって本当の事は何も言つてないんだろ
う」

「それは……」一瞬返す言葉に詰まった。あの頃、何があつたのか
を正直に話すことが奏子にとって本当に救いになるのか、それとも
傷口に塩を塗るだけになってしまうのか。二十年経つた今も判断出

来ずにいた。

「……悪い」電話の向こうから溜息が聞こえた。

「いや。俺も言い過ぎたよ。済まない」

「篠原が謝るような事じゃないさ。俺だって正直、お前が言うように逃げていただけだっていうことは解っているんだから」

「そうか……」

気まずい沈黙が流れる。

その時だった。「先生！」

背中を叩かれ振り向くと、ユニフォーム姿の生徒が血相を変えていた。「大変です篠原先生。バレー部の子が急に倒れちゃったんです」

「あ、ああ。すぐに行くよ。——悪い。後でかけ直すから」
そう言って一方的に電話を切った。

日曜日の午後、徹司は小さな花束とショートケーキの詰め合わせを手にもスピスを訪れた。晴れ渡る空の下、手入れの行き届いた庭には百合や撫子などが咲き誇っている。

石畳の通路を進み、エントランスホールへと向かう途中だった。車椅子に乗り、介護士の男性と花を眺める奏子の姿があった。カーディガンを羽織る背中では二週間前に訪れた時よりも一層細くなっている。風が吹けば折れてしまいそうな後姿に、徹司は唇を噛んだ。
共に生きた人間が自分の目の前から消えて行く。俊介も、添島和洋も、そして三沢奏子も。

徹司の心は激しく掻き毟られるように痛んだ。

「俊介」空を仰ぐ。「お前なら今の三沢さんになんて声を掛けるんだろうな」

徹司に気付いた介護士が奏子の肩を叩いた。奏子はゆっくりと振り返る。そしてあの頃と変わらない、少しはにかむような笑顔を見せた。

「やっぱり俺には言えないよ」

奏子に軽く手を振りながら、小さく呟いた。

覚醒

深夜の静けさと闇の中、ベッドの上の奏子は目を覚ました。

「やあ、奏子。いい夢は見れたかい」

ベリルは奏子の顔を覗き込むようにして立っていた。ベッドの足元にはいつものようにクロウが足を組んで腰を下ろしている。

「夢……」確かに長い夢を見ていた気がする。甘くほろ苦い青春時代の思い出。二十年も前の出来事が、鮮明な記憶として瞼の裏に残っていた。

「そうね。いい夢かどうかは分からないけれど、とても懐かしかったわ」

背凭れを起こそうと傍らのスイッチに手を伸ばしたが、腕が上手く動かない。シートに触れる指先の感触も、分厚いゴム手袋越しのように鈍かった。一体どういう事なのだろう。奏子の顔に焦りが浮かんだ。

「無理に起き上がろうとしなくてもいいよ」

サテンの手袋をつけたままのベリルの両手が、奏子の頬に触れた。「君は今から三沢奏子という肉体を捨てて旅に出る。この動かない身体はもう必要ないんだよ」

「肉体を捨てて？」

妖しく輝く緑色の瞳を不安げに見上げた。「私は死んだの？ それともこれも夢？」

ベリルは首を振った。「いいや。まだ死んでないよ。言っただろう、奏子が死ぬのは今日の夕方だって。それまでは僕と一緒に『在って無い』存在になるんだ」

「在って無い存在……」

赤い唇がああ、と動く。「会いたいんだろう、小塚俊介に」

「小塚君」俊介の名に、鼓動が一瞬高鳴る。「もしかして、小塚君のいる天国に連れて行ってくれるの」

「いいや。そういう意味じゃない。第一、天国や地獄なんてものは人間の想像の産物でしかないからね。そんなもの何処にもありはしないよ」

意外な言葉に奏子は何度も瞬きをした。天使と死神を名乗る門番の口から、天国の存在を否定されるとは思ってもみなかった。

「それじゃあ、どうやって小塚君に会う、っていうの」

「生きている小塚俊介の元に行けばいいんだよ。まだ元気だった頃の奏子がいる時代にね」

「まさか」枕の上で奏子は首を傾げた。「過去に戻る、っていうこと？　いくらあなた達でもそんなSFみたいな事が可能なわけが……」

「簡単さ」ベリルは座禅を組むように宙に浮かぶと、前後左右にゆつくりと身体を回転させた。胸元のリボンと金色の髪が暗い室内にふわりと揺れる。「僕たちと人間とでは、時間の流れ方が違うからね」

「時間の流れ方が違う？」

「奏子が深く考えることはないよ。説明したってどうせ分かんないだろうしね」

奏子は説明を求めるように足元のクロウに目を遣った。だが相変わらずクロウは黙ったまま、窓の外に目を向けている。

街灯の明かりに照らされながら風に揺れる木々の枝葉。瞬く星と淡い月の輝き。車のエンジン音どころか、巡回する看護師の足音一つしない完全な静寂。

「静かな夜ね」思わず呟いた。空気のざわめきは感じるのに、この世界には自分と二人の門番たちしかないような感覚に陥る。

「もうすぐゲートが開くからな」

クロウは背中を向けたまま答えた。「ゲートが開く時は、いつもこんなものだ」

「ゲート？」

「ああ。小塚俊介のいる世界へのゲートがな」

ベッドから立ち上がると窓を背に腕を組んだ。逆光に燕尾服のシルエットがはつきりと見える。「知りたかったんだろう、小塚俊介の死の原因を」

暗闇に浮かび上がるブルーグレイの鋭い視線を真直ぐ見返す。そして頷いた。「ええ。本当はずっと知りたかった」

「いいだろう」クロウの低く張りのある声が室内に響く。「これから過去の真実を知るお前は一つの選択をする。お前が何を選択するか俺たちには解っているが、それでもお前は自分で選ばなければならない。そして自らの手で扉を開けなければならない。それを見届けるのが俺たちの役目で、お前の前に姿を現した最大の理由だ」
一つの選択。そして自ら扉を開く――。

クロウの言葉の意図は理解できない。ただ、過去の世界に行き、「生きている」小塚俊介に逢える。そして二十年前の真相を知る事が出来る。それだけが奏子の背中を強く押していた。

「分かったわ。やってみる」

クロウは小さく頷いた。「時間だ」

見上げる天井の空間が波紋を描くように歪み、その中心からは乳白色の眩い光が溢れ出す。奏子は全身の力が抜けて行くのを感じた。
「行くよ、奏子」

ベリルの声とともに、奏子の意識は光の中に溶けていった。

「あなた。三沢さんがいる病院から電話があったわよ」

日曜日の早朝、徹司は妻に揺り起こされた。キッチンからは食事の支度をする匂いが漂っている。今日は朝から子供たちと動物園に行く約束をしていた。

徹司は掛け布団から半分だけ顔を出し、「なんだって？」と欠伸をした。

「だからお医者さんが電話をくれたの。三沢さん危篤ですって。今日がヤマらしいわ」

「まさか」しょぼつく目を何度も瞬かせた。「昨日見舞いに行った

ばかりだぞ」

「そんなこと分かっているわよ」

パジャマにエプロン姿の妻は肩をすくめた。「とにかく、三沢さんのお知り合いに連絡しておいて下さい、って病院から託^{たく}つたわ」
「そうか」ベッドの上に座ると、片手で頭を抱えた。

奏子に万が一の事があつた時は、篠原家に連絡するようにと病院に申し出たのは徹司自身だった。そのことを知った奏子は「篠原君にそんな迷惑はかけられない」と渋^{しぶ}っていたが、「もう少し昔の友人を信用してくれ」と何とか説得した。

「それで、子供たちとの約束はどうするの」

妻は夫を見下ろしながら、大きな溜息を吐いた。「行くんでしょ、病院に。だけど子供たちには何て言い訳するつもりなの」

徹司は返事に詰まった。「それは……」

「怒っているんじゃないの」

妻は首を振った。「ただ、いつも誰かの為に自分の時間を犠牲にしているあなたが心配なだけよ。それがあなたらしいと言えばあなたらしいけど。でも安心して。子供には私からちゃんと言っておくから。それに、これが本当に最後になるかもしれないでしょう」
延命措置を取らないホスピスで危篤になったという事は、妻が言うように恐らくこれが、生きている三沢奏子の顔を見る最後の機会になるだろう。

「いつも済まないな」

「何言ってるのよ」妻は徹司の背中を軽く叩いた。「お友達の時みたいに二度と同じ後悔はしたくない、って私に何度も話していたのはあなたでしょう」

「そうだったな」

ね、と妻は微笑んだ。「すぐに朝食の用意をするから、顔を洗ってらっしゃい」

妻と奏子は過去に一度だけ会った事がある。祖父の入院する大学病院を訪れた際、妻には「高校時代の同級生だから」とだけ告げて、

病状も碌に説明せずに家族で奏子を見舞った。

その帰り道、徹司は妻に、「あなたってこういうところは本当に無神経なのね」と強く窘められた。^{たしな}

放射線治療で髪と眉は抜け落ち、痩せ細った身体に浮腫んだ顔。^{むく}女性ならずとも他人には見られたくない姿だろう。子供たちは徹司の後ろに隠れ、怯えるように奏子を見ていた。妻とて気まづかったに違いない。奏子の心情を察すれば確かに無神経だったと、徹司は素直に反省した。

それ以来妻が奏子を見舞う機会は無かったが、何かと昔の同級生を気に掛ける夫に小言などを言った事は一度もない。むしろ奏子の境遇を知ってから妻は、女性の喜びそうな見舞いの品を的確に選んでくれるので徹司も助かっていた。

簡単な朝食を済ませると、徹司は携帯電話を手にとった。休日の朝六時。電話をするにはまだ時間が早いだろうと、友人たちには状況を知らせるメールを送った。

そして少し迷いながら、ある番号に電話を掛けた。

何度目かのコールの後、中年男性の眠たげな声が聞こえた。「もしもし」

「失礼ですが、和泉雅彦さんのお宅で間違いないでしょうか」^{いずみまさひこ}

「はあ。私が和泉ですが。どちら様ですか」

早朝の電話に、和泉は不機嫌そうに答えた。

「初めまして。三沢奏子さんの高校時代の同級生で、篠原という者です」

「奏子の同級生？」

「ええ。友人を代表して三沢さんや病院の連絡係の様な事をさせて頂いています」

和泉雅彦は奏子の元の夫だった。今は転勤先で再婚しているが、奏子が癌に侵されていると知った時には、丁重な見舞の手紙を寄越している。

「その、彼女の容態に何かあったのでしょうか」

用件に気付いた和泉の緊張している様子が伝わった。

徹司は軽く深呼吸をした。「先程病院の方から連絡がありました。三沢さんが危篤に陥ったようです。差し出がましいようですが、和泉さんにはお知らせしておいた方がいいと思います」

「危篤……」喉が鳴り、少し間が開いた。「分かりました。わざわざご連絡有難うございます」

「いいえ。お礼を言われるようなことはありません。……ところで、その、和泉さん」

「何でしょうか」

「その、病院の方には行かれるのですか」

「そうですね。家が遠いので少し時間はかかりますが、彼女には親戚もいませんし、これからの事もあるでしょうから、何とか駆け付けたいと思います」

ホスピスに入所したと同時に、奏子はアパートを引き払っていた。保険会社の外交員として働いていたこともあり、入院費は全て自身の生命保険金で賄っている。葬儀の手配すら自分でしていると云う。几帳面な性格の奏子らしいと言えば奏子らしいが、それはあまりにも寂しい最期にも感じられた。

「そうですね。そうして頂けると三沢さんも安心するでしょう」

「さあ、それはどうですかね」

和泉は苦笑した。「奏子の友人ならご存じかも知れませんが、彼女にとって私はあまりいい夫ではありませんでしたから」

「何もご自分をそんな風に仰らなくても」

そう言いながら、奏子の口から結婚生活についての話題が出た事は無かったと思い出した。

空に浮かぶ淡い綿雲。柔らかな風に揺れる満開の桜。

『ここは……』浅い微睡^{まじろ}みから覚めるように、奏子の意識が戻った。「懐かしいだろ。二十年前に奏子を通っていたS高校だよ」

ベリルは体育館の緑色の屋根の上から校内の様子を見渡していた。

正確に白線が引かれたグラウンド。規則正しく植えられた花々が咲く中庭。白亜の校舎には生徒や保護者たちの賑やかな声が反響している。

不思議な感覚だった。確かに自分自身の意思是「ここ」にあると感じるのに、肉体の感覚は全くない。当然目も耳も持たない筈なのに、望遠鏡から月を望むように、鮮明かつ自由に辺りを捉え、音を聞く事が出来る。まるで第三者の目線で過去の夢を見ているようだった。

「そりゃそうさ」

ベリルはいつもの調子で言った。「今の奏子は意識だけの存在だからね」

『私の言いたいことが分かるの?』

「解るとも。まあ、難しく考える事はないよ。そうだな、今の奏子は僕に憑依している幽霊、とも思えばいいんじゃないの」

門番に相応しい言葉とも思えないが、現状はベリルの言う通りだと納得せざるを得なかった。

『ねえ、ベリル。クロウは一緒じゃないの』

「ああ。クロウはまだ二十年後の奏子の部屋にいるよ」

どうして、と訊こうとした奏子を遮った。「ほら。今日は奏子たちの入学式だ。ここから奏子と小塚俊介の思い出が始まるんだろう」

『えっ。ええ……』

「じゃ、ゆっくり過去の真実とやらを見に行こうか」

期待と戸惑いを感じる奏子をよそに、ベリルは物見遊山にでも来たように軽い足取りで空を舞った。

桜花

校長、教頭の祝辞が述べられた後、壇上に立ったのは背の高い女子生徒だった。長く切り揃えた髪は丁寧に結われ、制服の襟には、他の新入生とは異なる白い大振りの造花が飾られている。

「新入生代表。一年A組、高木美帆子さんより入学の挨拶です」

アナウンスが講堂に響き渡ると、美帆子は深々と頭を下げた。そして手にした答辞を滔々と読み上げていく。

「へえ、入試の成績トップは女子だったんだ」

「ああ。俺、高木とは同じ中学だったんだけど、昔から頭は断トツに良かったよ。てっきりエリート私立に行くと思っていたんだけどな」

囁き合う男子生徒の隣で、徹司は欠伸を噛み殺すのに必死だった。真新しいサージの制服の匂いが鼻に付く。ふと横を見ると、幼馴染の俊介も盛大に欠伸をしているところだった。

二人は昨晚遅くまで、徹司の家でバスケットの強豪校としても有名な、S高校は、公立の進学校ながらスポーツの強豪校としても有名で、特にバレー部やバスケット部は何度もインターハイに出場していた。小学生の頃からバスケットボールに専念していた二人が、地元のS高校に合格が決まった日からは、毎日がお祭り騒ぎだった。特に俊介の両親は、成績の芳しくない息子の快拳に、諸手を挙げて喜んでいった。

PTA会長の祝辞、国歌斉唱が終わり、やっと堅苦しい式典が終了した。

新入生と保護者が各々の教室に戻る。俊介と徹司は一年A組、B組と分かれて教室に入った。担任、副担任からの挨拶と学校生活の心得などを聞き、生徒一人一人自己紹介を済ませると、その日は解散となった。

「クラスの雰囲気はどうだった？」

上履きを履き換えながら俊介は尋ねた。俊介と徹司の母親たちは学用品を買い揃える為に、という名目で早々に帰っている。

「どう、って言われてもまだよく解らないよ」

徹司は首を捻った。「でもみんな結構真面目そうだよな」

慣れないネクタイを緩めると、周りの新入生たちを見渡した。中学生の頃は、クラスの中に数人は目立ちたがり屋の少年少女たちがいたが、目に付く限りは派手な形をした学生の姿はない。配られたばかりの分厚い生徒手帳にも細かい校則がみっちり書き込まれている。S高校は校則の厳しさでも有名だった。

「だよなあ。みんな頭良さそうだし、勉強についていけるかどうか不安だよ」

姉にセツトして貰ったという髪を俊介は掻き毟った。

「入学したばかりで何を言ってるんだよ。でも、新入生代表が女子っていうのには少し驚いたけどな」

「ああ。高木とかいう奴な。あいつ、俺と同じクラスなんだよ」

俊介は溜息を吐いた。「頭のいい女、ってどうも苦手なんだよな。口煩そうだし、生意気そうだし」

徹司は新品のスニーカーの紐を左右対称になるように几帳面に結んだ。満足げに頷く。「その高木さんだけど、何でも全国模試で十位以内に入った事がある秀才らしいぜ」

「全国で十位？ 何でそんな天才がよりにもよって俺のクラスにいるんだよ。テストの平均点が上がるじゃないか」

徹司は半べそをかく俊介の向う脛を軽く蹴った。

「痛っ。何するんだよ」

「情けないこと言うなよ。その分バスケで頑張ればいいじゃないか」
「徹司はいいよ。成績いいんだからさ」

俊介は再び深い溜息を吐いた。「それに肝心のバスケだって、レギュラーを獲れるかどうか解らないのに」

「それは俺も同じだろ。あ、俊介。あれ見てみるよ」

正門前の前庭では部活動の勧誘をする上級生が、新入生たちに話

しかけたり、宣伝のビラを配ったりしている。その中にはドレス姿で習字を書いたり、奇抜な衣装を身に纏ってダンスやマジックなどのパフォーマンスを繰り広げる、もはや何部の宣伝なのかよく解らないものもあった。そして花壇の横では軽音楽部が流行りの曲を演奏し、その傍らでは吹奏楽部がクラシックを演奏したりと、騒がしいことこの上ない。

「こういうのを見ると高校生になった、って気がするよな」

徹司はその光景に思わず頬を緩めた。正門に向かう通路は新入生とその保護者で溢れ返っているが、子供の頃から背の高い徹司にとって、人混みは全く苦にならない。

「そうかなあ」この春ようやく百七十センチメートルに達した俊介は徹司を恨めしそうに見上げた。「そりゃ楽しそうだけどさ」

「俊介！」

突然、俊介の背中にショートカットの女子生徒が抱きついた。その襟には他の新入生と同じく桜の造花が付けられている。「やっと見つけた」

「ま、愛実！」俊介は振り返ると慌てて少女を引き剥がした。「いきなり何するんだよ」

少女は子犬のような丸い目を見開き、小首を傾げてみせた。「いいじゃない、久しぶりに会ったんだから。ねえ、徹ちゃん」

「久しぶり、って言ってもほんの四、五日前に会ったような気がするんだけどな」

数日前、徹司が俊介の家にいる時、愛実新しい制服姿を披露しに来ていた。

「一週間ぶりよ。昨日までおばあちゃんの家に行っていたんだもん」
大野愛実おおの まなみも彼らと同じ町内に住んでおり、幼稚園からずっと同じ学校に通っている。幼い頃から俊介を慕っている愛実は、俊介の「彼女」と公言しているが、末っ子の俊介にとって愛実は妹のような存在だった。

「みんなクラスが別々になっちゃったね。残念」

「家は近いんだし、別に構わないだろ」

「そうそう。それにどうせまたバスケット部のマネージャーになるつもりなんだろ」

徹司は皮肉混じりに言った。「大野みたいなチビじゃ高校ではつとまらないと思うけど」

「チビじゃないわよ。徹っちゃんが大きすぎるだけよ」

「どうかな」徹司は首を竦めた。

徹司はこの幼馴染の事が昔から苦手だった。中学生の時、愛実は男子バスケット部のマネージャーをしていたが、平気で男子更衣室や部屋に出入りしたり、他の部員の前でも明らかに俊介を依怙^{えこ}覇^{ひいき}したりと、愛実には無神経なところがままたある。何より試合中愛実の甲高い声で応援されると気がそがれた。俊介もそれとなく注意はしていたが、あまり効果はないようだった。

「おい、徹司。あれ小森先輩じゃないか」

俊介が指差した先には、ユニフォームを着てバスケットボールを模した被り物をかぶった男子生徒がいた。「バスケット部へようこそ。目指せ全国制覇!」と書かれたプラカードを片手に声を上げている。

「勧誘、っていうよりも仮装大会みたいね」

愛実は何度も飛び跳ねながら周りの様子を見ていた。

「本当だ。でも、何もここまでしなくてもいいと思うんだけどなあ」

俊介は呆れたように首を捻った。

「取り敢えず行こうぜ」

三人は人混みをかき分けながら、バスケット部のブースへ向かった。

「小森先輩。お久しぶりです」

ボールを頭に載せた男子生徒は、後輩の姿に気付くと片手を上げた。「よう。篠原に小塚。それに大野だっけ。久しぶりだな」

「それよりなんですか、その格好は」

「面白いだろ? 心配しなくても来年はお前たちにやらせてやるよ」

「ええ?」

小森はニヤリと笑うと、あからさまに嫌な顔をする俊介の背中を

思い切り叩いた。「それより小塚、お前よくうちの学校に合格出来たなあ。篠原からうちを受ける、って聞いた時には結構不安だったんだぜ。テストの度に補習受けていたもんな」

大声で笑う小森に、俊介は唇を尖らせた。「そんな言い方ないでしょう」

「悪い、悪い。あ、入部届けだろ。バレー部の連中にお前らを横取りされないうちに書いておいてくれよ」

簡易テントの下に並べられた机の上には、入部届の用紙が積まれている。既に名前が書き込まれた紙が数枚、文鎮の下に重ねられていた。

徹司は入部届を一枚手に取った。「横取り、なんてあるわけないじゃないですか。それに俺たちはバスケをやめる気はないですし」「いや、あいつらならやりかねん」

小森の口調は半ば本気だった。徹司と俊介は思わず目を見合わせる。

「先輩。私、マネージャー志望なんですけど、同じ紙でいいんですか」

ボールペンを手にした愛実に、小森は頭を振った。「悪いな、大野。うちの学校は男子部の女子マネ禁止なんだよ」

「そんなあ！ 私バスケ部のマネージャーになるためにS校に来たのに」

愛実は大仰に驚いてみせた。「バスケ部に入れないなら学校に来る意味ないじゃないですか」

「そんな大袈裟な」

「本当です」愛実は鼻息を荒くした。

きつと本気なんだろうな。そう考えながらも、徹司は愛実がマネージャーになれないことに内心胸を撫で下ろしていた。

「何とかならないんですか。先輩と私の仲じゃないですか」

「俺とお前の仲、って何だよ。人聞きが悪いな。同じ中学出身、っていただけだろ」

小森は煩わしそうに手を振った。「決まりは決まりだから、諦めろ」

「誰がそんなこと決めたのよ」

納得出来ない愛実は、頬を膨らませ、駄々っ子のように地団駄を踏んだ。その仕草に小森も閉口する。

「ねえ、俊介も何か言ってるよ」

「五月蠅いな」愛実の我儘に慣れている俊介も苛立ったように爪先を鳴らした。「俺にそんなこと言ってもしょうがないだろ。そんなにマナージャーをしたいなら女子バスケットに入ればいいじゃないか」

「もう、意地悪！」

二人のやり取りを尻目に、さっさと入部届を書き終えた徹司は周りを見渡した。テントの端では陸上部が同じように入部希望者の受付をしている。制服姿の男女が並んで座っているだけで、他の部のように過剰なパフォーマンスはしていないようだった。

そこへ上級生が一人の少女の腕を掴みながら近寄って来た。腕を引かれている少女の襟には、桜の造花が飾られている。

「例の子、連れて来たわよ。一年の……さん」

上級生は興奮気味に少女を仲間に紹介した。少女は戸惑ったように顔を赤らめ俯く。

「その子が噂の？」受付の生徒たちが腰を上げる。

「そう、うちの中学で一番俊足だった子よ」

「ちょっと、やめて下さい、先輩。私、本当に陸上部に入る気はないんです」

顔を上げた少女は上級生の手を振り払おうとするが、その腕はがっちりと掴まれている。

「駄目よ。あんたならちゃんと訓練すれば、インターハイどころかオリンピックだって目指せるんだからね。何もしないなんて勿体ないわよ」

随分強引な勧誘だな、と徹司は眉をひそめた。

「そんなこと言われても困るんです」

少女は困惑しきつた顔で、大きく首を振った。「それに他の部活に入る気ありませんし」

「だから体験入部だけでもいいから、一度試してみなよ」

「勘弁して下さい」

「ね、一日、いや二時間だけでもいいから……」

上級生が更に食い下がった時だった。

「もう、しつこいな！」

俊介の怒鳴り声が響いた。

驚いた上級生は思わず少女の腕を放し、バスケット部のブースを注視した。その隙に少女は人混みに紛れて行く。

「いい加減に諦めろよ。先輩も何処の部も例外なく駄目だって言ってるじゃないか。俺だってお遊びでバスケットをするためにこの学校を目指したわけじゃないんだからな」

滅多に声を荒げる事などない俊介の剣幕に愛実は大層だ。「

そんなに怒らなくてもいいじゃない」

「怒らせるようなことばかり言ってるのは愛実の方だろ。何でも自分の言う通りに行くとしたら、大間違いなんだからな。もう高校生なんだからもっと自覚しろよ」

愛実は目に涙を浮かべると、「もういいもん。なによ。俊介の馬鹿！」とその場から立ち去った。

「いいのかよ、小塚」

小森は鼻を鳴らす俊介の顔を覗きこんだ。「彼女を怒らせちゃって」

「彼女なんかじゃないですよ。それにどうせ明日になったら何事もなかったようにケロッ、としてるんですから」

「そういえばそんな奴だった気がするなあ」

小森は被り物をプラカードの柄で掻いた。徹司も「確かに」と頷く。

「だから放っておけばいいんです」

そう言い放つと入部届にサインした。

放課後の校内では、運動部員たちの多くがランニングを行っていた。校庭のトラックだけでなく、校内の敷地全体を回るもので、一周すれば二キロ近くになる。男子バスケット部では練習の前にこの距離を三周するのが日課だった。

俊介と徹司もいつものように並んで走っていた。ウォーミングアップとはいえ、二周を回った頃には息が切れてくる。

「やっぱりいきなり試合には出られないか」

来月の練習試合に参加するメンバーが発表されたが、当然その中に二人の名は無かった。

徹司は呼吸を乱さぬよう、ゆっくりと答える。「そりゃそうだろう。まだ入部したばかりだし仕方ないさ。夏に三年生がいなくなれば、きつと俺たちが選ばれるよ」

「だといけどな」

男子バスケット部には現在四十三人が在籍しているが、その半分を一年生が占めている。部の特性上、レギュラーメンバーになるための競争率が高く、また補欠枠も狭い。二年生になっても夏の大会の補欠メンバーにすら選ばれなかった部員の多くが退部していく、と小森から聞いていた。

二人は校庭をゆっくり回りながら、トラックの中央付近でスタートダッシュの練習をする陸上部の様子を眺めた。ピツ、ピツ、と小刻みに笛の鳴る音が響いている。

「陸上みたいに個人競技だったら、一年でも実力次第ですぐに大会に出られるのにな」

「まあな」徹司はジャージの袖で額の汗を拭くと、あることを思い出した。「陸上部といえば、変な事があつたんだよな」

「えっ。なんだよ」

徹司は入学式の時に見た、陸上部の話をした。

「へえ。確かに厄介そうな先輩だな。でもそこまで強引に誘われる位なんだから、相当実力がある奴なんじゃないの」

「それがそんな風には見えなかったんだよな。ごく普通の地味な子、
って感じで」

「走るのに地味も派手もないと思うけど」

「それもそうか」

俊介もその名に違わず俊足の持ち主で、陸上部とバスケット部を掛持ちしていたこともある。

「あと半周だ」

花壇に差し掛かったところで徹司は「あっ」と声を上げた。「あの子のことだよ」

木製のベンチに腰掛け、ぼんやりとグラウンドを眺める少女がいた。目元が隠れるほど長く伸びた前髪に痩せた身体つき。

「な、足が速そうには見えないだろ」

「っていうかさ」俊介は走るスピードを緩めた。「あいつ、俺と同じクラスの奴だと思う」

「思う？」徹司は同じようにピッチを落とし、眉をひそめた。「どっちなんだよ」

「いや、多分A組の奴だ。名前は……み、み、ミワ？ ミタ？ はつきりとは分からないけど、確かそんな名前だったんだよな」

「大丈夫かよ、お前」

呆れ顔の徹司に、俊介は「まあ……」と曖昧に頷いた。

四片

バスケ部の練習と後片付けを終えた徹司たちは、慌てて部室に戻った。片付けに手間取り、退校時間の七時半まであと十分ほどしかない。薄暗い部室棟は閑散としていた。

「それって、A組の三沢の事だろ」

同級生の石井は制服に着替えながら言った。「あいつの俊足は有名だったからな」

「知っている子なのか？」

「俺、三沢と同じ中学出身なんだよ。二年の時は同じクラスだったし」

石井は机に置かれた缶ジュースを一本手に取ると、一気に飲み干した。ネクタイは首に掛けられたままになっている。

「それであんなに強引な勧誘を受けていたのか」

「まあね。リレーであいつをアンカーにしておけば、まず負ける事は無い、って位だよ。陸上部が欲しがるのも無理ないと思うな」

へえ、と徹司は感心した。「人は見かけによらないもんだな」

「まあ、三沢は見た目もパツとしないし、普段は居るのか居ないのか分からないくらい大人しいからな。足のことがなければ俺だってよく覚えていなかったかもしれない」

「パツとしない、か」

「そんなことより、高木美帆子、ってやっぱりいいよな」

石井はパイプ椅子に腰かけ天井を見上げた。「先生が話しているのを小耳にはさんだんだけどさ、あいつ、入試の成績満点だったらしいぜ。その上美人だしスタイルもいいだろ。三沢とは雲泥の差だよな」

「流石にそれは言い過ぎだろ」

徹司はベンチに座る奏子の姿を思い返した。石井が言うほどではないが、確かに陰気な印象が残っている。

それに比べ、美帆子は入学当初から注目の的だった。初めこそ才色兼備で近寄り難いイメージがあったが、意外と気さくな人柄のようで、特に男子生徒からの人気が高い。

「篠原だつてちよつとはいいいと思つてゐるだろ」

石井は心なしか顔を赤らめている。徹司は少し考えてから首を振った。「悪いけど興味ないな。第一、高木さんとは一度も話をしたことないし」

「そうなのか？」

「そりやそうだろ。部活もクラスも違うんだから」

「じゃあ小塚に訊いてみるか」

「悪い、遅くなつて」

部室の扉が開き、俊介が戻ってきた。ジャージの胸元がぐつしよりと濡れている。

「何だよ小塚、その格好は。顔もまともに洗えないのか」

石井は呆れたように俊介の胸元を指差した。「やつぱり小塚みたいな粗忽者^{そつご}じゃ高木とは釣り合わないよな」

「何の話だよ」俊介はスポーツドリンクで喉を潤すと、ジャージを脱ぎだした。「どうせ悪口だろうけど」

「悪口なんて言うかよ。そうじゃなくて、お前高木と同じクラスなんだろ。あいつのことどう思うか、って訊きたかつたんだよ」

「委員長？ お高くとまつてるし、如何にも優等生、って感じがしてあんまり好きじゃないな」

委員長というのは美帆子のあだ名だった。眼鏡をかけている時の姿が学級委員長のイメージに重なるところから付けられたらしい。

「お高い？ そんなことはないだろ」

「いいや。女のくせに天才なんて、みんなそうに決まつてる」

大真面目に答えた俊介に、石井は笑いながら手を叩いた。「やつぱりガキだ」

「石井から言つておいてなんだよ。とにかく俺はああいうタイプは駄目なんだよ」

子供の頃、徹司と俊介が互いに好きな女の子の話をすることもあったが、俊介が優等生タイプの女子に興味を示したことは無かった。「それじゃあ、小塚の本命はあの騒がしい幼馴染か」

「愛実の話は勘弁してくれよ」

俊介は大きな溜息をついた。ネクタイを上着のポケットに突っ込み、石井の横の席に腰を下ろす。「最近本当に面倒臭くなってきたんだから」

入学式から数日間は拗ねていた愛実だが、部活動が本格的に始めると、何事もなかったかのように体育館に現れるようになった。それだけでなく愛実の甲高い声は体育館の中で反響しやすく五月蠅がられていたのだが、そのうち同級生の女子生徒を大勢引き連れ、我が物顔で通路を占領しては大騒ぎをするようになり、他の部の生徒からも顰蹙を買うようになった。堪りかねた上級生の何人かが注意をしたが、愛実たちは全く聞く耳を持たなかった。顧問の教師に相談してみたものの、部活動の見学は原則自由なので、「バスケ部の応援しているだけだ」と言われれば、教師といえども一部の生徒だけを出入り禁止にする事は出来ない。俊介も愛実が騒ぐ度に怒っていたが、愛実の図々しさに半ば諦め気味だった。

「大野は五月蠅いかなり我儘そうだけど、顔は可愛い方だろ。それにいつそ付き合ってやれば大人しくなっていいかもしれないぜ」

「じゃあ石井が付き合えばいいだろ」

俊介がむっ、としたように言い返すと、石井は困った様に顔を掻いた。「ごめん。俺も無理だわ」

だろう、と言おうとした時、廊下を走る足音が聞こえた。そしてノック音と同時に扉が開く。

「俊介、徹ちゃん。早く帰らないと先生に怒られちゃうわよ」

三人は顔を見合わせると、同時に溜息をついた。

あどけなさの残る顔と、少し子供っぽい言動、部活動に励む姿。俊介を見つめていると、二十年を経た今でも、高校生の頃の甘く張

り裂けそうな感情が沸々と甦ってくる。ベリルにもこの心は伝わっているのだろうか。奏子はベリルの表情を窺ったが、ベリルはいつもの笑顔を浮かべているだけだった。

「小塚俊介はともかく、篠原徹司にしてみれば奏子のことは入学当時から気になる存在だったようだね」

『でもあまりいい印象じゃなかったみたい』

奏子は苦笑した。自分の表情を見られたくなくて前髪を伸ばしていたのだが、確かにあれでは徹司ならずとも周りからの印象は悪かっただろう。

「人間なんて時とともに変わっていく生き物だよ」

『そうね。篠原君の真面目で几帳面なところは昔から変わらないみたいけど』

奏子は少し考えてから尋ねた。『ねえ、ベリル。それよりもどうして……』

「言いたい事は解るよ。どうして篠原徹司なのか、だろう」

『ええ』

ベリルは常に徹司の傍にいた。「在って無い存在」の奏子も自然、徹司から見た俊介しか知る事が出来ない。時間と空間を超越する「門番」が何故徹司の傍にしか現れないのか不思議だった。

「篠原徹司は奏子と同じく特別な存在だからさ」

『特別？』

「ああ。今はまだ解らないだろうけど、『時』が来たら必ず思い出すよ」

ベリルはそれ以上何も答えなかった。

昼食を終えた徹司は廊下の窓に凭れ、下敷を団扇代わりに煽いていた。

「毎日暑いよなあ」

誰に言う訳でもなく、一人愚痴った。梅雨入りして以来雨が続き、教室の中は湿気を含んだ生温かい空気が充滿している。男子生徒が

天井に設置されている扇風機の下に集まっているが、かえって暑苦しい。

「テツ！」隣の教室から俊介が出てきた。大量の本を抱きかかえ、足元は少しふらついている。

「どうしたんだよ、それ」

俊介は本の上に顎を乗せニヤリと笑った。「手伝ってくれるだろ」「そりゃ構わないけど……」

徹司は本の半分を受け取った。大判で厚みもあり、かなりの重量がある。「歴史書か」

「重たいだろ。これを一人で運ばせるなんてフグタの奴も人使いが荒いよな」

「お前ほどじゃないと思うけど。そもそも俊介が悪いんだろ」

徹司は階段を上りながら俊介を睨みつけた。現国の時間に居眠りをした罰に、担任の福田から資料として使った本の返却を命じられたらしい。

「それにしても、今日はやけに蒸すな」

「夏になればいっすつきりするんだけどな」

四階の図書室に着く頃には、シャツが汗で背中に張り付いていた。「へえ、図書室ってここにあつたのか」

俊介はプレートを見上げて言った。「四階だっていうのはフグタに聞いたんだけどな」

「そんな事も知らなかったのかよ」

「だって俺には縁がないところだろ」

両手が塞がっている俊介は爪先で引き戸を勢いよく開けた。扉が衝撃でガシャン、と大きな音を立てる。

「きゃっ」一人の生徒が声を上げた。

「あ、悪い」

奏子が椅子から立ち上がった姿勢で驚いたように入口を見つめていた。「小塚君……」

「何だ、三沢か。そういえば三沢は図書委員だよな。悪いけどこの

本の返却手続きしておいてくれよ」

俊介は奏子の前に本を置いた。「三時限目で使ったやつだよ」

「ええ、それはいいけど……」

本を読むためなのか、奏子は長い前髪をピンで留めている。徹司は初めて奏子の顔を間近で見た。色白、というよりは青白い肌。大きく丸い瞳。意外に整った顔立ちだとは思ったが、他人から逃げるような視線が気になる。余程自分に自信が持てないのだろうか。そう感じた時だった。

「あのさあ。なんで三沢って人の顔を見て話さないんだよ」

「えっ」俊介の声に奏子は顔を上げた。戸惑いながら俊介に尋ねる。

「あの、私何か悪いこと言ったかしら」

「そうじゃないよ」俊介は首を振った。「そうやって下ばかり見ていたら、人の話聞いているのかどうか解らないだよ」

奏子は再び俯いた。「……ごめんなさい」

「別に謝るような事じゃないけど」

何故か俊介の声は苛立っていた。「そうじゃなくて。ああ、何て言ったらいいんだろ」

「おい、俊介」徹司は眉をひそめた。「そんな言い方ないだろう」

「だって、本当のことだろ」俊介は唇を尖らせた。

奏子は耳まで真っ赤にして立ち竦んでいる。俊介の思わぬ言葉にどう声を掛けようか考えていると、再び扉が開く音が聞こえた。

「あら、小塚君たちが図書室に来るなんて珍しいわね」

「委員長」

美帆子は笑顔で徹司たちの傍に歩み寄った。「明日は雨、って言いたいところだけど、梅雨だから嫌味にもならないわね」

「委員長こそ、昼休みの間も勉強かよ」

険のある言い方だったが、美帆子は「まさか」と受け流すと、奏子の肩を軽く叩いた。「三沢さん呼びに来ただけよ」

「私？」

「ええ。今日は日直でしょ。福田先生が探していたわよ」

「分かったわ。ありがとう」

奏子はホッとしたように息をつく、俯き加減のままそくさと図書室を出た。

「なんて、嘘なんだけどね」

美帆子は奏子の背中を見送ると、舌先を覗かせた。

「嘘？」徹司は首を傾げた。「何でそんな事を……」

「小塚君が急にあんなことを言うからよ。いきなり注意されても三沢さんが戸惑うだけでしょ」

「聞いていたのか」徹司は腕を組んだ。「それで三沢さんを助けた、って訳か」

ええ、と美帆子は頷くと、机に寄り掛かった。「小塚君、このところ三沢さんに対する態度がおかしいわよね」

「そうなのか？」

徹司の問いに俊介は顔を横に向けた。「そんなことないよ。委員長長の勘違いだろ」

「いいえ」美帆子は意味ありげに笑った。「あの事、まだ気にしてるんしょ」

「何の事だよ」俊介は眉間に皺を寄せると美帆子を睨みつけた。

「この間の体育の授業のことよ」

「関係ないよ」

「そうかしら」

「おい。二人して一体何の話をしてるんだよ」

事情が見えない徹司が間に入ろうとした時、俊介が腕を掴んだ。

「そんなのどうでもいいだろ。行こうぜ」

「あ、ああ……」

強引に腕を引かれながら、美帆子を振り返った。

またね。微笑む美帆子の唇がそう動いたように見えた。

土曜日の午後のハンバーガーショップは家族連れや学生で賑わっている。徹司は店の前で偶然会った美帆子と一緒に昼食をとっている。

た。

「篠原君がこんな時間に帰るなんて珍しいんじゃないの」

カウンター席でフライドポテトをつまみながら美帆子は尋ねた。

外は七月に入っても曇天の日々が続いている。

「ああ。中間テスト以来かな」

週明けに期末テストを控え、全校生徒の部活動は止められていた。俊介に友人たちとの勉強会に誘われたが、面子を見る限り馬鹿騒ぎばかりで勉強は進まないだろう、と辞退した。

「篠原君とこうして二人で食事をしているなんて不思議よね」

「高木さんのファンに見つかったら半殺しにされるかもな」

石井の顔を思い出し、徹司は一人「うん、うん」と頷いた。

「何よ、それ」美帆子は声を上げて笑った。

徹司と美帆子が二人きりで話すのはこれで二度目だった。二週間ほど前に美帆子から体育の授業での出来事を聞いていた。

百メートル走のタイムを計る時だった。通常男女別、出席番号順に二人ずつ走ることになっているのだが、何故か俊介と奏子が組むことになった。奏子の足に興味を持っていた俊介と、奏子の中学時代を知る同級生が体育教師と一緒に走らせて欲しい、と頼み込んだらしい。教師が確認したところ、奏子も了承した。美帆子も含め、同級生たちは珍しい組み合わせに注目していた。

綺麗なスタートを切った俊介に比べ、奏子は若干出遅れたように見えたが、すぐに追いついた。そしてゴールまであと数メートルのところまで奏子が前に出た。俊介は奏子にコンマ数秒差で負けたのだ。「しかし、たかだか駆けっこで負けたくらいで拗ねるなんて、俊介も随分とガキだよな」

徹司はハンバーガーの包み紙を小さく丸めるとコーラを啜った。

「別に拗ねている訳じゃないと思うわ」

「でも、俊介の態度は相変わらずなんだろ？」

「そっじゃなくって」美帆子は首を振った。「小塚君は三沢さんの事が好きなのよ」

コーラを思い切り噴き出した。何度も激しく噎せかえり、周りの客は冷ややかな視線を寄越している。

「なっ、なっ、なんだよ、それ」

徹司は慌てて腕で口元を拭った。

「篠原君がそんなに動揺してどうするのよ」

正面の窓に飛んだ水滴を拭き取りながら、美帆子は呆れたように言った。「親友なのに気付いていなかったの？」

「き、気付くもなにも、俊介は三沢さんみたいなタイプはどちらか、って言うとか、嫌いというか、なんというか、その、苦手な筈だ」

「じゃあ、最近得意になったんじゃないの」

新しいパータオルを手渡された徹司は気を落ち着かせようと二、三度咳払いした。「その、俊介の口から聞いたのか？ 三沢さんが好きだ、って」

「言われなくても解るわよ、そんな事くらい」

束ねた髪を指先で弄びながら、ふふん、と笑った。

「まさか女の勘、とか言うんじゃないだろうな」

「違うわよ。小塚君の態度を見れば解る、って言ってるの」

「態度？」徹司は額に皺を寄せた。「前は三沢さんには冷たい、って言ってなかったっけ」

美帆子は頬杖をつくとか、隣の徹司に顔を向けた。「そうじゃなくて、おかしい、って言ったの。そうねえ……。例えば、小塚君は他の子たちと喋っている時って、いつも機嫌良くニコニコ笑ってるじゃない。でも三沢さんが近くに来たり、誰かが三沢さんの話を始めると途端に黙り込んでうのよ」

「男が女に足で負けたからバツが悪いだけだろ」

「みんなもそう思っているみたい。でもそれだけじゃないのよ。三沢さんが他の男の子と話していると、じっと観察するように見てるのよ。変でしょ？」

「それこそ気のせいじゃないのか。ただ単に大人しい三沢さんが男と喋っているのが珍しいだけ、とか」

「そう言われればそうなんだけど」

美帆子のはあ、と溜息をついた。「でも、私には解るのよ。間違
いなく小塚君は三沢さんに好意を持っているわ」

「どうしてそんな風に言い切れるんだよ」

顔を覗き込む徹司の瞳を美帆子は真直ぐに見返した。

「私も篠原君の事が好きだから」

「えっ」徹司は目を大きく見開いた。そのまま動きを止める。

「冗談よ。真に迫ってた？」

美帆子は再び明るい笑い声を上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7229q/>

ヘヴンズ・ゲート

2011年5月7日15時25分発行